

# 『禪源諸詮集都序』の訳注研究（十）

小石井修道

## 凡例

一、凡例は『駒澤大學佛教學部研究紀要』第五十四号に準ずる。

## 禪源諸詮集都序目次

### 〔一〕 裴休の序 卷 上（目次省略）

- 〔二〕 〔二〇〕 （以上「紀要」第五十三号）
- 〔二〕 〔二五〕 （以上「紀要」第五十四号）
- 〔二〕 〔二九〕 （以上「論集」第二十七号）
- 〔三〇〕 〔三二〕 （以上「紀要」第五十五号）

### 卷 下

- 〔三三〕 空宗と性宗の十の相違点
- 〔三四〕 法と義の解釈の相違

- 〔三五〕 性と心の相違
- 〔三六〕 性の解釈の相違
- 〔三七〕 智と知の解釈の相違
- 〔三八〕 有我と無我の解釈の相違
- 〔三九〕 真理のあらわし方の相違——消極性と積極性——
- 〔四〇〕 名と体の相違
- 〔四一〕 二諦と三諦の解釈の相違
- 〔四二〕 三性説の解釈の相違
- 〔四三〕 仏徳の有無についての相違
- 〔四四〕 禪の三宗は根本においては一つである（以上「論集」第二十八号）
- 〔四五〕 賾教の二の意味——逐機の賰と化儀の賰——
- 〔四六〕 賰漸の種々な解釈（以上「紀要」第五十六号）
- 〔四七〕 一真心体こそ教法の根源である

- 〔四八〕 仏が經を説いた本意
- 〔四九〕 仏の本意と三種の教
- 〔五〇〕 仏と衆生、悟と迷との関係
- 〔五一〕 迷いの過程——凡夫の相——（以上『論集』二十九号）
- 〔五二〕 悟りへの道
- 〔五三〕 悟りと迷いの体系を図示する理由
- 〔五四〕 悟りと迷いの図式（以上『紀要』第五十七号）
- 〔四五〕 悟りと迷いの図式によつて反省自覺すべきこと
- 〔五六〕 修道の心がまえ
- 〔五七〕 むすび（一）
- 〔五八〕 むすび（二）
- 〔五九〕 後記

（以上今号）

〔五五〕 悟りと迷いの図式によつて反省自覺すべきこと

（1）詳究前述、諦觀此圖、對勘自他、及想賢聖、爲同爲異、爲妄爲眞、我在何門、佛在何位、爲當別體、爲復同源。即自然不執著於凡夫、不僭濫於聖位、不耽滯於愛見、不推讓於佛心也。

（2）然初十重是一藏經所治法身中、<sup>一第</sup>  
 重。煩惱之病生起元由、<sup>次二重。</sup>漸漸加增、<sup>我法二執。</sup>  
 乃至麁重、<sup>三毒。慧滅受報。之狀。</sup>後十重是法身信方服藥、<sup>前三重。</sup>汗出病差、<sup>菩提心開發。將理方</sup>  
 法、<sup>六波羅蜜。</sup>漸漸減退、<sup>後六重。</sup>乃至平復成佛之狀。

詳らかに前述を究め、諦かに此の図を観じ、自他を對勘し、及び賢聖を想え。為同じきや為異なるや、為妄なりや為眞なりや、我れは何れの門に在りや、佛は何れの位に在りや、為當体を別にするや、為復源を同じくするやと。即ち自然に凡夫に執着せず、聖位を僭濫せず、愛見に耽滯せず、仏心に推讓せざらん。

然るに初めの十重<sup>(1)</sup>は是れ一藏經の所治の法身の中にて（第一重なり）、煩惱の病の生起する元由の（次の二重なり）、漸漸に加増し（我法二執）、乃至麁重となり（三毒、業を造る）、慧の滅する（報を受く）の状なり。後の十重<sup>(3)</sup>は是れ法身の方を信じ薬を服し（前の三重なり）、汗出て病差え（菩提心の開發なり）、理を將つて法を方し（六波羅蜜）、漸漸に減退して（後六より九に至る）、乃至平復する（成仏）の状なり。

(3) 如有一人、在纏。諸根具足、法身恒沙功德。強

壯、常住不變、妄不能染、多藝、恆沙妙用。忽然得病、無始漸

漸加增、其次七重。乃至氣絕、第十重、隨業受報。唯心上

暖、賴耶識中無漏智種。忽遇良醫、大善知識。知其命在、見凡夫。

是佛。強灌神藥、初聞不信、頻說不捨。忽然甦惺、悟解初未

能言、纔始悟解、心雖明了。乃至漸語、能善說法化人。漸

能行李、漸行十地六度等法。直至平復、佛所解伎藝。

無所不爲。神通光明、千變萬化、一切妙智、善巧方便。

(4) 以法一一對合、何疑不除。即知一切衆生不能神變作用者、但以業識惑病所拘、非己法身不具妙德。今愚者難云、汝既頓悟即佛、何不放光者。何殊令病未平復之人、便作身上本藝也。然世醫處方必先候脈。若不對病狀輕重、何辨方書是非。若不約痊癒淺深、何論將理法則。法醫亦爾。

\*詳=(底)ハ以下補写。田原本(略称、田)ヲ参考トス。\*賢聖=聖賢(弘)。\*妄=眞(明)。\*眞=妄(明)。\*耽=耽(弘)。\*〈重〉=重也(弘)。\*〈受報〉=ナシ(弘)。\*狀=狀(受報)(弘)。(弘)。(底)ハ「也」ヲ補筆ス。以下同。\*〈一〉=〈一〉(底)=〈三〉(弘)(明)。\*〈重〉=重也(弘)。\*〈受報〉=ナシ(弘)。\*狀=狀(受報)(弘)。

如えれば一人有り、在纏の法身、諸根具足し、恒沙の功德、強壯にして、常住不变にして、妄も染すること能わざるなり、多芸なるも、恒沙の妙用、忽然として、病を得、無始の無明、漸漸に増し、其の次の七重、乃至氣絶して、第十重なり。業に隨いて報いを受く、唯だ心上のみ暖し、賴耶識の中の無漏智の種。忽ち良医に遇い、大善知識、其の命の在るを知り、凡夫人も即心是れ仏なるを見る、強い神薬を灌げば、初めは聞いて信せざるも、頻りに説いて捨てず、忽然として甦惺し、悟解す、初めは未だ言うこと能わざるも、纔かに始めて悟解すれば、心は明了なりと雖も、猶お未だ説法問答すること能わず、乃至漸に語り、能善く説法し人を化するなり、漸に能く行李して、漸に十地六度等の法を行ずるなり、直に平復に至り、成仏、解する所の伎芸、為さざる所無し、神通光明、千変萬化、一切妙智、善巧方便なり。

法を以て一一対合せば、何んの疑いか除かざらん。即ち知る、一切衆生の神変作用すること能わざるは、但だ業識惑病に拘わるるを以てなるのみにして、己が法身に妙徳を具えざるには非ざることを。今ま愚者の難じて、汝既に頓悟して即ち仏なれば、何んぞ光を放たざるやと云えるは、何んぞ病の未だ平復せざる人をして、便ち身上の本芸を作さしめんとするに殊ならんや。然るに世医の処法は必ず先に脈を候う。若し病状の軽重に対せずんば、何んぞ方書の是非を弁ぜんや。若し痊癒の浅深に約せんば、何んぞ理を將つて則に法ることを論ぜんや。法医も亦た爾り。

\*「重」＝「重也」（弘）＝「重汗出」（明）。\*「汗出」＝ナシ（弘）。\*「後」＝「從」（弘）（明）。\*「七」＝「十」（底）。\*「隨業受報」＝「也」（弘）＝ナシ（明）。

\*「上」＝頭（弘）（明）。\*「說」＝「就」（明）。\*「甦惺」＝蘇醒（弘）（明）。\*「纔始悟解心雖明了猶未能說法問答」＝「初悟人說法答他問難悉未的也」（弘）

＝「初悟之人未能說法答他問難皆悉未得」（明）。\*「能善」＝「解」（弘）＝「能」（明）。\*「化人」＝「也」（弘）（明）。\*「李」＝履（明）。\*「漸行十地六度等法」＝「十地十波羅密也」（弘）＝「十地十波羅蜜」（明）。\*「伎」＝技（弘）。\*「千變萬化」＝ナシ（弘）（明）。\*「妙智善巧方便」＝「種智」（弘）（明）。

\*「何」＝「有何」（弘）＝「何有」（明）。\*「不除」＝事而不除也（弘）＝而不除也（明）。\*「變」＝通（弘）。\*「也」＝ナシ（弘）（明）。\*「癒」＝愈（弘）（明）。

(1) 前に述べたことを詳細に見究め、この図をはつきりと観察し、そこで自他(衆生)をつきあわせ、賢聖(仏)に思いをいたせ。両者は同じなのか異つてはいるのか、また妄なのが真なのか、自分はどの入り口のところにいるのか、仏はどの位にあるのか、その両者は本体を別にするのか、それとも根源を同じくするのか、と。そうすれば、自然に凡夫にも執着せず、聖位をも僭称せず、愛見に溺れることもなく、仏心に卑下することもなくなるであろう。

(2) そこで、はじめの(染法の)十重は、一大蔵經の治療の対象となる法身の中において、  
 「第一重」、煩惱の病が元凶より生起し、「次の二重」、漸漸に増加して、「我法の二執(六七)まで」、ひいては<sup>あら</sup>軽く重い迷いの心から、「(八と九の)三毒により業を造る」、智慧の滅亡にまで至る様を示したものである。「(十の)報を受ける」。後の(淨法の)十重は法身が処方を信じて薬を服用し、「前の(一、二、三の)三重」、汗が出て病がやや癒え、「(四の)菩提心の開発」、理にかなつた治療により、「(五の)六波羅蜜」、漸漸に病が減退して、「(六の)九に至る」ついに平癒に至る。「(十の)成仏」様を示したものである。

(3) 聖えば、一人の人があるとする「在纏位の法身」。諸根である六根を備え、「無量の功德」、頑強であつて、「常住不変で、妄心も染すことができない」、学問伎芸に富んでいる。「(以上、一の)無量の妙用」。それが、突然に病となり、「(二の)無始の無明」、漸漸に悪化して、「その次の(三と九の)七重」ついに息絶え、「第十である。業によつてその報いを受けるのである」、「心臓だけが暖かい状態に至る」、「(一の)阿賴耶識の中の無漏智の種子」。ところがふと良医にめぐり遇い、「(二の)大善知識」、まだ命が在ることが判り、「(三の)凡夫においてもその心こそが仏である」ということを見抜く、「無理やりに妙薬を流し込まれる」、「初めは聞いて信じなくても、くりかえし説いて見捨てない」。すると突然に蘇醒して、「解悟する」、初めはもの言うことができなくとも、「(四の)初めて悟解したばかりでは、心は明了であつても、まだ説法や問答することはできない」、やがては漸に語り出し、「巧みに法を説き人を教化することができる」、

しだいに歩けるようになり（（五十九）段階的に十地、六波羅蜜等の法を踏み行つてゆくのである）、ついには平癒に至り（（十）成仏）、持ち前の伎芸も一つとしてできぬものはないようになるのである（神通光明、千変万化、一切妙智、善巧方便のことである）。

（4）このように諸法を一つ一つつき合せていくならば、いかなる疑いが取り除かれぬことがあろうか。さすれば、一切の衆生が神通妙用を發揮できないのは、業識や惑病に執れ<sup>とらわ</sup>ているだけのことであつて、己が法身に妙徳が備わつていないのである、ということが判るのである。いま愚かな者が非難して言う、あなたが頓悟して仏そのものであるならば、どうして光明を放たないのか、と。この言いぐさは、病が平癒していない人に持ち前の伎芸をしろというのと同じではないか。世間の医者の処法はまず先に脈を調べるもの。もし病状の軽重に対応するのでなければ、どうして処方箋の是非を判断できようか。もし恢復の浅深に合わせるのでなければ、どうして理にかなつた治療だと言えようか。仏法の癒しもまた同じことなのである。

（1）初めの十重＝五一段の迷いの過程。五四段の図でいえば、染の十重をさす。

（2）二重なり＝迷いの第二の不覚をいうが、弘治本と明藏本が三重とするのは、その第二の不覚より妄念が起ころる（＝念起）段階をも数えたが故に相違が生まれたもので、理解に根本的な相違がある訳ではない。

（3）後の十重＝五二段の悟りへの道。五四段の図でいえば、淨の十重をさす。

（4）方＝後文に「薬を服す」等があるので、ここは薬の処方のこと。

（5）前の三重＝五二段の一、遇善知識開示。一、発悲智願、誓証菩提。三、随分修習五行を指す。五四段の図では、一、覺頓悟・四信、二、發菩提心、三、修業五行・覺察妄心となる。第三については諸本が一致するが、第一、第二は、図が明確に一致するとは言えない。

（6）菩提心の開発＝五二段では、四、大菩提心從此顯発とあるから、悟りへの道の四段階である。このことは、一応、五四段の図も諸本一致していると解せよう。

（7）六波羅蜜＝次の文の割注は「六より」とあるのを参照すれば、悟りへの道の五段階に相当することになろう。ただ、五二段の五は以知法性無慳等心とあり、六において、隨順修行六波羅蜜、定慧力用、我法双亡……と「六波羅蜜」の語が出る。五四段の図では、迷いの六・七の執法・執我が対応する悟りへの道の五・六の我法双亡であることから、六波羅蜜により我亡を修するとしても、六波羅蜜と迷いの七の執我が直接対応する図とはならない。そこに諸本の図の一致しないところが表面化する。故に、六波羅蜜だけを問題にすれば四に含めることも、五に含めることも可能といえよう。

- (8) 在纏の法身＝煩惱に覆われた法身。如來藏をいう。三段の注(6)参照。「都序」本文で在纏の語は、一八段に既出。
- (9) 恒沙の妙用＝以上は五一段の迷いの過程の、「一切衆生に、皆な本覺真心有り」を指している。
- (10) 忽然……＝再び迷いの過程を、第十の受報まで略記する。
- (11) 無漏智の種＝阿賴耶識の第八識と種子については、一八段の注(8)(11)、特に二五段の注(35)を参考されたい。これより、悟りへの道が、再び略説される。

(12) 即心是れ仏＝即心即仏に同じ。四段とその注(7)、および一段に既出。

(13) 悟解＝頓悟と同じで、蘇醒に喩えられている。澄觀の「華嚴經行願品疏」卷一（続藏經卷七—二五二右上以下）と「演義鈔」卷二（大正三六一一六四〇）を踏まえた「大疏鈔」卷三下や「略疏鈔」卷四にまとめられる、悟相を解悟と証悟の二種に分ける説でいえば、頓悟漸修の頓悟は解悟のことであるから、ここは悟解もその解悟のことと理解してよからう。

(14) 初めは未だ言う……＝人を教化できるようになり、成仏が完成されていく過程を説明したもの。使用されている仏教用語は既に出てるものであり、語句注は再説しない。なお「行李」は「行履」の意であるが、ここは前後からふつうの歩行の意に解した。『祖堂集』卷十鏡清道・章（III—五二）、「問う、十二時中、如何に行李せん。師云く、一步も移すを得ざれ」。

(15) 業識＝「起信論」に心に依つて意と意識とが転ることを説き、意に業識・転識・現識・智識・相続識の五種名を挙ぐ。その最初について、「には名づけて業識と為す、謂く無明の力にて不覺心が動ずるが故なり」（岩波文庫本 四〇頁）とある。

(16) 惑病＝法藏の「華嚴經探玄記」卷一七（大正藏卷三五一四三三〇）に「一の行滿を明かす。一は惑病を除く。二は無明を破す」とある。惑業については、二五段、三二段およびその注(4)を、三毒の惑については、五一段およびその注(14)(18)(19)参照。

(17) 世医＝法医に対して、世間の医者のこと。『祖堂集』卷六洞山良价章（II—六四）の「汝、道うを見ずや、世医（代々の名医）手を拱く、と」とあるのとは別。江藍生・曹廣順「唐五代語言詞典」頁三四一参照（上海教育出版社、一九九七年）。

## 〔五六〕 修道の心がまえ

(1) 故今具述迷悟各十重之本末、將前  
經論統說三種之淺深。相對照之、如指諸  
掌。勸諸學者、善自安心。行卽任隨寄一  
門、解卽須通達無礙。不得慮其偏局、便

故に今ま具<sup>つ</sup>さに迷と悟との各々の十重の本末を述べ、前の経論を将つて三種の  
經論統說三種之淺深を統説す。相い対して之れを照らせば、諸を掌に指すが如くならん。諸々の  
学者に勧む、善自心を安んぜよ。行は即ち隨寄の<sup>(1)</sup>一門に任すも、解は即ち須ら  
く通達無礙なるべし。其の偏局を慮<sup>うれ</sup>えて、便ち溝蕩<sup>もうとう</sup>として指帰する所無きを得ざ

漭蕩無所指歸。直須洞鑑源流、令分菽麥、必使同中見異、異中見同。鏡像千差、莫執好醜、鏡明一相、莫忌青黃。千器一金、唯無阻隔、一珠千影、元不混和。建志運心、等虛空界、防非察念、在毫釐間。見色聞聲、自思如影響否。動身舉意、自料爲佛法否、美膳糲食、自想無憎愛否、炎涼凍暖、自看無避就否、乃至利衰毀譽稱譏苦樂、一一審自返照、實得情意一種否。必若自料、未得如此、卽色未似影、聲未似響也。設實頓悟、終須漸修。莫如貧窮人、終日數他寶、自無半錢分。六祖大師云、佛說一切法、爲度一切心、我無一切心、何須一切法。今時人但將此語輕於聽學、都不自觀實得無心否。若無心者、八風不能動也。設習氣未盡、瞋念任運起時、無打罵離他心、貪念任運起時、無營求令得心、見他榮盛時、無嫉妬求勝心、一切時中、於自己無憂飢凍心、無恐人輕賤心乃至種種、此等亦得名爲無一切心人也。此名修道。若得對違順等境、無貪瞋愛惡、此名得道。各各返照、

れ。直に須らく洞かに源流を鑑みて、菽麦を分たしめ、必ず同の中に異を見、異の中に同を見せしむべし。鏡像は千差なるも、好醜に執すること莫れ。鏡明は一相なれど、青黃<sup>(3)</sup>を忌むこと莫れ。千器は一金にして、唯だ阻隔無く、一珠は千影なれど、元より混和せず。志を建て心を運ぶこと、虛空界に等しく、非を防ぎ念を察すること、毫釐の間に在れ。色を見、声を聞いては、自ら思え、影と響との如きや否やと。身を動かし意を擧ぐるに、自ら料れ、仏法の為なりや否やと。美膳と糲食とに、自ら想え、憎と愛と無きや否やと。炎と涼、凍と暖とに、自ら看よ、避と就と無きや否やと。乃至利と衰と毀と譽と称と譏と苦と樂<sup>(5)</sup>とに、一一審自かに返照せよ、実に情意の一種なるを得るや否やと。必若し自ら料るに、未だ此くの如くなるを得ずんば、即ち色は未だ影に似ず、声は未だ響に似ざるなり。設い實に頓悟するも、終に須らく漸修すべし。貧窮の人の、終日他の宝を數えて、自ら半錢の分無きが如くなること莫れ。六祖大師<sup>(8)</sup>云く、「仏の一切の法を説くは、一切の心を度せんが為なり、我れに一切の心無し、何んぞ一切の法を須いんや」と。今時の人は但だ此の語を將つて聽学を軽んずるのみにして、都べて自ら實に無心を得るや否やを観ぜず。若し無心ならば、八風も動かすこと能わざるなり。設い習氣未だ尽きずして、瞋念の任運に起る時にも、打罵し他を離<sup>(あた)</sup>とするの心無く、貪念の任運に起る時も、營求して得しめんとするの心無く、他の榮盛なるを見るにも、嫉妬求勝の心無く、一切時中、自己に於いて飢凍を憂うるの心無く、人の輕賤するを恐るるの心乃至種種無くんば、此れ等も亦た名づけて一切心無き人と為すを得るなり。此れ道を修すと名づくるなり。若し違順等の境<sup>(11)</sup>に対して、貪瞋愛惡すること無きを得ば、此れ道を得たりと名づく。各各返照して、病有らば即ち治せ、病無くんば薬のむ勿れ。<sup>(12)</sup>

有病卽治、無病勿藥。

(2) 問、貪瞋等卽空、便名無一切心、何必對治。答、若爾汝今忽遭重病痛苦、痛苦卽空<sup>\*</sup>而能發業、業亦空而能招苦、苦亦空<sup>\*</sup>而只麼難忍。故前圖中體空成事。猶如杌木上鬼全空

只麼驚人奔走倒地、打頭破額裂也。若以業卽空、空只麼造業、卽須知地獄燒煮<sup>\*</sup>楚痛、楚痛亦空<sup>\*</sup>、只麼楚痛。若云亦任楚痛者、卽現今設有人、以火燒刀斫、汝何得不任。今觀學道者、聞一句違情之語、猶不能任、豈肯任燒斫乎。

問う、貪瞋等の即ち空なるを、便ち一切の心無しと名づけなば、何んぞ対治するを必いんや。答う、若し爾らば、汝今ま忽ち重病の痛苦に遭わんに、痛苦即ち空なるを便ち無病と名づけなば、何んぞ藥もて治すを必いんや。須らく知るべし、貪瞋は空にして而も能く業を発し、業も亦た空にして而も能く苦を招き、苦も亦た空にして只麼も忍び難きことを。故に前の図の中に体空・成事とせり（猶お杌木の上の鬼の全く空なるも、只麼も人を驚かして、奔走して地に倒れ、頭を打ちて額を破裂かしむが如し）。若し業の即ち空なるに、空の只麼も業を造るを以てせば、即ち須らく知るべし、地獄の燒煮<sup>(13)</sup>の楚痛の、楚痛も亦た空なるも、只麼も楚痛なることを。若し亦た楚痛に任すと云わば、即ち現に今、設し人有り、火をして焼き刀もて斫らんに、汝何んぞ任せざるを得んや。今、学道の者を観るに、一句違情の語を聞いてすら、猶お任すこと能わず、豈に燒<sup>しゃう</sup>斫<sup>しゃく</sup>に任すことを肯ぜんや。

\* 説＝ナシ(弘)(明)。\* 諸＝與(弘)＝其(明)。\* 不＝又不(弘)(明)。\* 直須＝ナシ(弘)＝須(明)。\* 中見＝處而(弘)(明)。\* 唯＝雖(弘)(明)。\* 響＝嚮(弘)。\* 膳＝繕(弘)(明)。\* 憎＝嫌(弘)(明)。\* 無＝免(弘)(明)。\* 反＝反(明)。\* 響＝嚮(弘)。\* 得＝ナシ(弘)(明)。\* 若＝ナシ(弘)。\* 飢＝饑(明)。\* 輕賤＝賤輕(底)。\* 人＝ナシ(弘)(明)。\* 無＝都無(弘)(明)。\* 反＝反(明)。\* 勿＝不(弘)。\* 空＝常空(弘)。\* 而＝ナシ(弘)(明)。\* 中＝中云(弘)(明)。\* 猶＝ナシ(弘)(明)。\* 人得＝人得(弘)(明)。\* 打＝ナシ(弘)(明)。\* 也＝ナシ(弘)(明)。\* 之＝ナシ(弘)(明)。\* 乎＝乎へ如此者十中有九也(弘)(明)。\* 楚痛＝痛楚(弘)(明)。\* 楚痛＝ナシ(弘)(明)。

(1) そこで、いま迷いと悟りの各々の十重の本末を具体的に述べ、前の経論によつて三種の禅の浅深を統括し、相い対してこれらを照合すれば、それは、あたかも己が掌を指すがごとくに明瞭となろう。諸々の参考者に勧める、善く心を安んぜよ。

たとえ修行においては特定の一門に随おうとも、悟解においては自由無碍に通達していなければならぬ。しかし、また偏りを怕れるあまり、茫然として究極の帰着点の無い状態に陥つてもならない。源と流と明確に観察して、菽まめと麦の区別をし、必ず同の中に異を見、異の中に同を見なければならぬ。鏡に映つた像が千差万別であつても、その美醜の別に執着してはならぬ。だが鏡の映すはたらきが一つであるからといって、青黄の別を忌避することはない。また千の器も一つの金でできていて、互いに阻み隔てることは無く、さりとて一つの珠に映る千の影は、もとより入り乱れることがないのである。志を立て心を運ぶこと虚空と同じくし、非を防ぎ念を察知するには、わずかな一瞬の間を捉えねばならぬ。色を見、声を聞く際には、自ら思え、それは影や響のようなものではないか、と。身を動かし心をはたらかせる際には、自ら思慮せよ、それが仏法にかなつてゐるかどうか、と。美食や粗食に対しては、自ら想え、好き嫌いの思いが無かつたかどうか、と。暑さと涼しさ、凍えと暖かさとに対するは、自ら看よ、それを避けたりそれに就いたりすることが無かつたかどうか、と。さらに、(八風の)利と衰、毀と誉、称と譏、苦と樂とについても、一つ一つ仔細に返照せよ、真に情と意とが一つであり得たかどうか、と。もし自ら思料して、未だこのようになり得ていなにならば、色は影のようではなく、声は響きのようではないことになつてしまふのである(つまり実体あるものだということになつてしまふ)。たとえ実際に「頓悟」したとしても、結局は「漸修」が必要である。貧乏人が、一日中、他人の宝を勘定して、自分は半錢の取り分もない、というふうであつてはならぬ。六祖大師も言つてゐる、「仏が一切法を説いたのは、一切の迷心を解脱せんが為である。だが、わたしには一切の心など無い、どうして一切法など必要であろう」と。今時の人は、ただこの語に基づいて、教えを学ぶことを軽んずるばかりで、自らが実際に無心を得てゐるかどうかを全く顧みない。無心であれば、八風も動かすことはできないのである。たとい習氣は尽きていないにせよ、瞋りの念がふと起つた時でも打ちののしる復讐の心は無く、貪りの念がふと起つた時でもそれを何とか手に入れようとする心は無く、他人の榮華を目にした時でも嫉妬してそれに勝ちたいと思う心は無く、自己においても常に飢えや凍えを憂うる心が無く、人からさげすまれるのを恐れる心や、それに類した種々の心が無い、さすれば一切の心の無い人と名づけてよいのである。これを「道を修す」という。もし順逆等の境遇に対して、貪り瞋りや好惡の念が無いようにできれば、これを「道を得た」というのである。各自返照して、病が有れば治せ、病が無ければ薬は無用である。

(2) 問う、「貪り瞋り等が空にほかならない、それを一切の心が無いと名づける、というのなら、どうして対処が必要である

ろうか」。答え、「そうだとすると、あなたがもし重い病で苦痛に遭つた場合、その苦痛が空にほかならない、それは病が無いということと、それなら薬で治癒する必要もない、ということになつてしまふ。つまり、貪り瞋りは空でありながら、しかも業（悪い行為）を発す<sup>〔おこ〕</sup>ことができ、その業も空でありながらよく苦を招くことができ、さらに苦も空でありながらこれほどに忍び難い、ということを知らねばならぬ。それ故に前の図の中でも体空・成事と言つたのである（たとえば枝葉のない木が幽靈に見えるのは全くの空であるが、かくも人を驚かせ、そのせいで人は逃げ回り地に倒れ、頭が割れ額が裂けるのである）。業が空でありながら、その空がかくも業を造るということからすれば、地獄で焼かれ煮られる痛みについても、その痛みが空でありながら、しかもかくも痛むのだということを知らねばならない。もしそれでも痛むままに任せとと言うのであれば、現に今もし人がいたとして、火で焼かれ刀で切られる場合、あなたはどうしてそれに任せずにおれないのか。今、学道の者を観るに、気に入らぬ言葉を一言聞いてすら、そのままに任せきりできかないのに、どうして焼かれ切られるままに任せたりできようか。

- (1) 隨寄＝修行者が指導者に隨い、その人にたよること。
- (2) 荻麦を分たしめ＝『春秋左氏伝』成公十八年（十三經注疏）卷二八一二八丁左の故事に基づく。「荻麦不分」でまめと麦の区別がつかないこと、愚かなことの喻え。『碧巖録』三八則評唱（岩波文庫本一中八〇頁）にも「荻麦不分」とある。
- (3) 青黄＝青黄はすべての色の代表。そこからこの二字で一切の差別相を言い表わす。例えば南嶽慧思の偈に「天も蓋う能わず地も載せず、無來無去無障礙、無長無短無青黃、中間及び内外に在らず」とある（景德伝燈錄）卷二十七・禪文化本五五六頁。）。
- (4) 影と響との如し＝『祖堂集』卷一五（IV—一〇〇）の汾州無業章に「一切諸法は影の如く響の如く、実なる者有ること無し」とある。以下、六つの具体的な修行の点検項目をあげる。
- (5) 利と衰と……＝後文に言う「八風」のこと。八風は『起信論』（岩波文庫本九二頁）の忍門にも説かれ、その文は五一一段の注<sup>〔12〕</sup>に既に引用す。
- (6) 設い實に頓悟……＝宗密教学の根本思想の「頓悟漸修」説であり、「漸修」を強調するところに注意すべきである。
- (7) 貧窮の人の……＝『華嚴經』の「菩薩問明品」（大正卷一〇一六八a）に「人の他の宝を数えて、自ら半錢の分無きが如く、法に於て修行せざる、多聞のものも亦是の如し」とあるによる。
- (8) 六祖大師云く……＝『伝心法要』（入矢義高訳注本一三〇頁）と『宛陵錄』（同一九七頁）に同文が引用され、前者は「祖師云」とい

う。鎌田本には、「六祖壇經」（敦煌本）に「無念法者、見一切法、不著一切法、遍一切處、不著一切處」（参照、楊曾文『敦煌新本六祖壇經』三三頁）と見えるのみと指摘する。

(9) 一切の心無し』『伝心法要』（前掲書一二頁）に「十方の諸仏を供養するよりは、一箇の無心の道人を供養するに如かず。何が故ぞ。無心とは一切の心なきなり。如如の体は、内は木石の如くにして、動かず搖がず、外は虚空の如くにして、塞がず礙えず、能所無く、方所無く、相貌無く、得失無し。趨く者は敢えて此の法に入らず、空に落ちて棲泊の処なからん」とを恐るればなりとある。

(10) 無心を得る』『菩提達摩無心論』（スタイン五六一九号）は次のように始まる。「夫れ理は無言なり。言を仮りて理を顯わすを要す。大道は無相なり、龜を接する為めに形を見わす。今、且らく仮りに二人を立て、共に無心の論を談ず。弟子、和尚に問うて曰く、有心か無心か。答えて曰く、無心。問うて曰く、無心ならば、誰か能く見聞覚知し、誰か無心なることを知る。答えて曰く、還た是れ無心、能く見聞覚知し、還た是れ無心、能く無心なることを知る。問うて曰く、既に若し無心ならば、即ち合に見聞覚知有ること無かるべし。云何が見聞知有ることを得ん。答えて曰く、我れは無心と雖も、能く見、能く聞き、能く覺し、能く知る」（柳田聖山『禪語錄』八一頁。中央公論社）。また『伝心法要』（前掲書一三頁）に「此の心は即ち無心の心なり。一切の相を離せば、衆生と諸仏と更に差別なし。但だ能く無心なる、便ち是れ究竟なり」とか、「此の法即ち心なり、心外に法無し。此の心即ち法なり、法外に心無し。心自から無心ならば、亦た無心なる者無し。心を將つて心を無すれば、心却つて有と成る」とある。

(11) 違順等の境』違は逆境、順は順境。三祖僧璨の『信心銘』（『景德伝燈錄』卷三〇所収。禪文化本六一六頁）に「現前せんと欲得すれば、順逆を存すること莫かれ。違順相い争う、是れを心の病と為す」とある。

(12) 病有らば……』『一人四行論』にいわく、「有る人、顯禪師に問う、何をか薬と謂う。答う、一切の大乗は是れ病いに対する語なり。若し能く心に即して病いを起さざる時、何ぞ病いに対する薬を須いん。……此れは是れ病いに対する語なり。若し病い無き時、何ぞ此の薬を須いん」（柳田『達摩の語錄』六六・禪の語錄一・二三三頁）。

(13) 地獄の焼煮』『大疏』卷中三（続藏卷一四一—六四右下）に經文の地獄を証して次のように言う。「地獄とは、梵に捺落迦(naraka)と云い、此に苦器と云う。謂く、是れ受苦の人を盛り貯える器なり。今ま地獄と云うは、地下に獄有り、罪人を拘繫して、種種の苦を受く。此方の刑獄の称に順ずるが為に、故に訳して爾か云う」。また、根本と近辺と孤独の三種類の地獄を分け、根本に八熱と八寒を説き、八熱について次のように言う。「八熱とは、処所の縱廣は皆な十千由旬なり。初め此より下は、二万二千由旬を過ぎて等活地獄有り、多く共に聚集して苦具もて残害するに悶絶して地を辟く。空中の声の言く、還た等しく活くべし。歎然えて復た起こる。等活の下の四千に黒繩（繩もて拌り廻り鑿る等）、衆合（多くの人聚集し、両つの鉄もて羶・馬・象・虎・師子

等の頭、山間に之に通りて血を流す。復た和合せしめて鉄の槽にて厭(庄)し、鉄の山にて墮(せま)すも亦た爾り、号叫(あいづ)へ尋(さめ)いで鉄室に捨て、火起(こ)りて痛切に号叫す、大号叫(あいづ)へ室宅は胎藏の如し。苦は前より過ぐるが故に大なり、燃(か)へ鐵熬串棒等にて焼炙するなり、極燒燃(三)又鐵串もて下貫して両脛及び頂を徹(とお)し、又た鏃もて裏(くる)み鑊(かま)にて煎(じ)る。苦も亦た前より過ぐ、無間(くわん)へ略して六有り。一、四方より火刺す。二、鐵炭にて煎鍛す。三、鐵山。四、鐵釘の苦。五、鐵丸。六、洋銅なり等の七獄有り。傍に相当するに皆な一千由旬を隔てり。これらの釈はさうに詳しく『大疏鈔』卷十上(同一四二二右下以下)に説明される。なお、八地獄は、梵語で、Samjiva, Kālasūtra, Saṃghāta, Raurava, Mahāraurava, Tapana, Pratāpana, Avīci といふ。定方晟『須弥山と極樂』(講談社現代新書)三八頁参照。

## [五七] むすび (一)

問、上來所叙三種教、三宗禪、十所以、十別異、輪迴及所修證又各十重、理無不窮、事無不備、研習覗味、足可修心。何必更集禪詮、數過百卷耶。一百六十一卷

答、衆生惑病、各各不同。數等塵沙、何唯八萬。諸聖方便、有無量門。一心性相、有無量義。上來所述、但是提綱。雖統之不出所陳、而用之千變萬勢。況先哲後俊各有所長、古聖今賢各有所利。故集諸家之善、記其宗徒。有不安者、亦不改易。但遺闕意勢者、注而圓之、文字繁重者、注而辯之。仍於每一家之首、注評大

問う、上來叙せし所の三種の教(1)えと、三宗の禪(2)と、十の所以(3)と、十の別異(4)と、輪迴及び修証の所の又た各々十重(5)なるとは、理は窮めざる無く、事は備わらざる無く、研習覗味せば、心を修す足(6)可し。何んぞ更に禪詮を集めて、數、百卷を過ぐるを必いんや(もち)へ一百六十卷なり。

答う、衆生の惑病は各各同じからず。數、塵沙に等しく、何んぞ唯だに八万のみならんや。諸聖の方便にも、無量の門有り。一心の性相にも、無量の義有り。上來述べし所は、但だ是れ提綱なるのみ。之れを統ぶれば陳ぶる所を出でずと雖も、而も之れを用うれば千變萬勢なり。況んや先哲後俊、各々長ずる所有り、古聖今賢、各々利する所有るをや。故に諸家の善きを集めて、其の宗徒を記せり。安んぜざる者有るも、亦た改易せず。但だ意勢を遺闕せる者のみは、注して之れを円かにして、文字繁重なる者は、注して之れを弁じたり。仍お毎一家の首ごとに於いて注して大意を評す。綱を提ぐるは、意、綱を張るに在り、綱を去つて綱を存すべからず。『華嚴經』に云く、「大教の網を張つて、人天の魚を漁(す)い、涅槃の岸

意。提綱意在張網、不可去網存綱。

華嚴  
經云

張大教網、漉人置涅槃岸。舉領意在着衣、不可棄衣取領。若但集而不叙、如無綱之網。若但叙而不集、如無網之綱。思而悉之、不煩設難。然尅己獨善之輩、不必遍尋。若欲爲人之師、直須備通本末。好學之士、披閱之時、必須一一詳之、是何宗何教之義。用之不錯、皆成妙藥。用之差互、皆成反惡。

に置く」と。領を挙ぐるは、意、衣を着るに在り、衣を棄てて領を取るべからず。若し但だ集むるのみにして叙せんば、綱無きの綱の如し。<sup>(8)</sup> 若し但だ叙するのみにして集めずんば、網無きの網の如し。思いて之れを悉くせば、難を設くるを煩わざらん。然るに尅己獨善の輩は必ずしも遍くは尋ねず。若し人の師たらんと欲せば、直に須らく備さに本末に通すべし。好学の士、披閱の時、必ず須らく一之れを詳かにすべし、是れ何れの宗、何れの教の義ぞ。之れを用いて錯らずんば、皆な妙薬と成らんも、之れを用いて差互せば、皆な反惡と成らん。

\*所＝ナシ(弘)(明)。\*習＝尋(弘)(明)。\*覗＝玩(明)。\*更＝更讀藏經及(弘)(明)。\*集＝ナシ(弘)。\*禪詮＝諸禪偈(弘)(明)。\*數過百卷＝ナシ(弘)。\*耶へ一百六十卷＝ナシ(弘)(明)。\*俊＝雋(弘)。\*勢＝義(明)。\*〈經〉＝ナシ(弘)(明)。\*但＝只(弘)。\*而＝之(弘)。\*遍＝偏(明)。\*反＝返(弘)。\*惡＝惡(音汚)(弘)。

問う、「以上述べてきた三種の教えと三宗の禅、その関連する十の理由と十の相違点、及び輪廻と修証の道の各十段階によるならば、窮め尽くさない理は無く、完備しない事も無い。それ故にこれを追究し味わうならば、心を修めるに十分である。どうしてその上更に百巻をも超えるほど〈百六十巻〉の禅の言葉を集める必要があるのか」。

答う、「衆生の迷いの病は各々異なり、その数も無限であるから、どうして(それに対処する)法門が八万に限定できようか。諸聖の方便にも無量の法門が有り、一心の性相も無量の義が有る。以上述べた所は、提綱にすぎない。だから総括すればここに述べた範囲を出るものではないが、用いる場合にはそれは千万にも変化する。まして況んや先の哲人も後の俊秀も各々長所をもち、古の聖人も今の賢人にも各々得るべきところがあるのだから、だからこそ諸家の主張の善きところを集めて、それに

属する宗徒のことを記録したのである。たとえ不満な事柄があつても改めないが、ただ意図が不十分なものだけは注記で完全にし、文字が繁雑なものは注記で弁別を加えた。そして、それぞれの派のはじめに大意を寸評しておいた。綱もとづなを提るのは網あみを張ることに意味があるのであって、網無しに綱のみが存することはありえない。『華嚴經』に「大教の網を張つて、人天の魚をすくい採り、涅槃の岸に置く」と言つてゐる。また領あらを挙るのは衣を着ることに意味があるのであって、衣を棄てて領のみを取ることはありえない。もし集めるだけで系統づけをしなければ、綱のない網のようであり、逆に系統づけるだけで集めることをしなければ、網の無い綱のようである。このことをつきつめて考えれば、わざわざそのような論難を設けるには及ばぬであろう。しかし、ひとりよがりの輩は必ずしもすべてを調べようとはしまい。もし人の師たらんと思うならば、本末全体に通曉しなければならない。だから好学の士は、これをひもとく場合には、これはどの宗の、どの教の教えか、一つ一つ詳かにする必要がある。これらを正しく用いれば、皆な妙薬となるけれども、これらを誤つて用いれば、皆な藥害となるのである。

- (1) 三種の教え＝二五段の密意依性説相教、二七段の密意破相顯性教、二九段の顯示真心即性教の三種をさす。
- (2) 三宗の禪＝一二段の息妄修心宗、二三段の泯絕無寄宗、三四段の直顯心性宗の三宗をさす。
- (3) 十の所以＝一〇段に十の所以の項目が挙げられ、一段より二〇段までの各段に十の所以が具体的に詳説される。
- (4) 十の別異＝三三段に十の別異の項目が挙げられ、三四段より四三段までの各段に十の別異が具体的に詳説される。
- (5) 輪廻及び修証……=五一段に輪廻つまり迷いの十重が説かれ、五二段に修証つまり悟りの十重が説かれる。
- (6) 一百六十卷＝本文に百卷以上と記し、さらにこの割注を加えるのは、底本のみである。この割注の意味は未詳であり、敦煌本の末尾の著作目録に「集禪源諸論閻要百三十卷」とあるとの関係も不明である。また、「圭峰禪師碑銘」や「宋高僧伝」卷六の宗密伝に、著述として「禪藏」の名が挙げられるが、この著の実態も推測の域を出ない。ポール・ドミエヴィル著、林信明訳「チベットのシナ仏教」（『禪學研究』六一号、一九八二年八月三一日）および田中良昭『敦煌禪宗文獻の研究』（前掲書）四三七頁以下参照。
- (7) 「華嚴經」に……八十『華嚴經』卷五九離世問品の「天人の龍を搏撮して、涅槃の岸に安置す」（大正一〇一三一四c）による。
- (8) 領を挙ぐる……=『禪源諸詮集』は存在せず、實際は「都序」のみが撰述されたとする説があるが、両者の関係を考える上で、六十『華嚴經』卷四三（大正九一六七〇c）も同じ語句。

ここは注目すべき発言である。「諸説集」は「衣」や「網」に当り、「都序」は「領」や「綱」に比定され、「都序」で叙し「諸説集」で集め、その両者が相俟つてはじめて完善を得ると言つてはいるからである。なお、この譬喻については、一段「裴休序」(3)の「綱領を振えば挙ぐる者は皆な順い」を参照せよ。

## 〔五八〕 むすび (二)

(1) 然結集次第、不易倫排。據入道方便、即合先開本心、次通理事、次讀法勝妙、呵世過患、勸誠修習、後示以對治方便、漸次門戶。今欲依此編之、乃覺師資昭穆顛倒、交不穩便。且如六代之後、多述一真、達磨大師却教四行、不可孫爲部首、祖爲末篇。數日之中、思惟此事、欲將達磨宗枝之外爲首、又以彼諸家所教之禪、所述之理、非代代可師通方之常道、或因修練功至證得、即以之示人、求那、慧闍、臥輪之流。或因聽讀聖教生解、即以之攝衆、慧聞禪師之類。志公、王梵士、王遠公、其製作、或詠歌至道、或嗟嘆迷凡、或但釋義、或唯勵行、或籠羅諸教、竟不

然るに結集<sup>(1)</sup>の次第は、倫排し易からず。入道の方便に拠らば、即ち合<sup>(2)</sup>に先に本心を開き、次に理事を通じ、次に法の勝妙を讀し、世の過患を呵し、修習を勸誠し、後に示すに對治の方便、漸次の門戶を以てすべし。今、此れに依りて之れを編まんと欲すれば、乃ち師資の昭穆<sup>(2)</sup>顛倒し、交も<sup>(3)</sup>穩便ならざるを覚ゆ。且如ば六代の後、多<sup>(4)</sup>ね一真を述べ、達磨大師は却つて四行を教うるも、孫を部首と為し、祖を末篇と為すべからず。數日の中、此の事を思惟し、達磨宗枝の外を將つて首と為さんと欲せしも、又た以<sup>(5)</sup>えらく、彼の諸家の教うる所の禪、述べる所の理は、代代師とすべき通方の常道<sup>(5)</sup>に非ず、と。或いは修練の功の証得に至れるに因り、即ち之れを以て人に示し<sup>(6)</sup>、求那、慧闍、臥輪の流なり<sup>(7)</sup>、或いは聖教を聴読して解を生ぜしに因りて、即ち之れを以て衆を摂し<sup>(8)</sup>、慧聞禪師の類なり、或いは其の跡を降して而も性に適い、<sup>(9)</sup>一時の間、群迷を警策し<sup>(10)</sup>、志公、傅大師、王梵志の類なり<sup>(11)</sup>、或いは其の節を高くして法を守り、一國中にて僧侶に軌範たるも<sup>(12)</sup>、廬山の遠公の類なり、或いは其の製作、或いは至道を詠歌し、或いは迷凡を嗟嘆し、或いは但だ義を釈するのみ、或いは唯だ行を励ますのみ、或いは諸教を籠羅<sup>(13)</sup>うのみにして、竟に指南せず、或いは偏に<sup>(14)</sup>一門のみを讀じて、事、衆に通ぜず。皆な禪門の影響、仏法の笙簧たりと雖も、若し始終之れに依つて釈迦の法と為さば、即ち未だ可ならざるなり<sup>(15)</sup>。天台の言教は広本にして、備さに始終有りと雖も、又た此の集の内に在らず。心を以て嗣

指南、或偏讚一門、事不通衆、雖皆禪門影響、佛法笙簧、若始終依之爲釋迦法、即未可也。天台言教廣本、雖備有始終、又不在此集中。以心傳嗣、唯達磨宗。心是法源、何法不備。所修禪行、似局一門、所傳心宗、實通三學。況復尋其始、始者迦葉、阿難。親稟釋迦、代代相傳、二

面授、三十七代、有云西國已有二十八祖者、下祖傳序中卽具分析。至于吾師。緬思、何幸爲釋迦三十八代嫡孫。

に伝うるは、唯だ達磨宗のみ。心は是れ法源、何れの法か備わらざらん。修むる所の禪行は、一門に局るに似たるも、伝うる所の心宗は、實に三學に通ず。況や復た其の始を尋ねれば、始とは迦葉(16)、阿難(17)なり、親しく釈迦に稟けて、代代相伝し、一一面授して、三十七代(18)、有るいは西國に已に二十八祖有りと云うは、下の祖伝の序の中にて即ち具さに分析せん、吾が師に至れるをや、緬かに思うに、何の幸いありてか釈迦三十八代(19)の嫡孫たり。

(2) 故今所集之次者、先錄達磨一宗、次編諸家雜述、後寫印宗聖教。聖教居後者、如世上官司文案、曹判爲先、尊官判押於後也。唯寫文的者十餘卷。就當宗之中、以尊卑昭穆、展轉倫緒、而爲次第。其中頓漸相間、理行相參、遞相解縛、自然心無所住。淨名云、貪著禪味是菩薩縛、以方便生是菩薩解、又瑜伽說、悲增智增、互相解縛。悟修之道既備、解行於是圓通。次傍覽諸家以廣聞見、然後捧讀聖教、以印始終。豈不因此正法久住。在餘之志、雖無所求、然護法之心、神理不應屈我、繼襲之功、先祖不

故に今ま集むる所の次は、先に達磨の一宗を錄し、次に諸家の雜述を編し、後に宗を印する聖教を写すなり。聖教の後に居るは、世上の官司の文案の、曹の判を先と為し、尊官の判の後に押さるるが如し、唯だ文的なる者十余卷を写すのみなり。當宗(20)の中に就いては、尊卑昭穆を以て、展轉倫緒して、次第を為す。其中には頓漸相(21)間わり、理行相(22)參じて、遞相に縛を解き、自然に心は住する所無からん。『淨名』に云く、「禪味に貪著するは是れ菩薩の縛、方便を以て生ずるは是れ菩薩の解なり」と。又た『瑜伽』に説く、「悲増し智増して、互相に縛を解く」と。悟修の道既に備わり、解行是に於いて円通す。次に傍に諸家を覽て以て聞見を広くし、然る後に聖教を捧読して、以て始終を印す。豈に此れに因つて正法久しく住せざらんや。余の志に在りては、求むる所無しと雖も、然れど護法の心は、神理も應に我を屈するべからず、繼襲の功は、先祖も應に我れを捨つべからず、法施の恩は、後学も應に我れに奉くべからざらん。如し奉かず屈せず捨てず、

應捨我、法施之恩、後學不應辜我。如不  
辜不屈不捨、卽願共諸同緣、速會諸佛會  
矣。

禪源諸詮集序卷下\*

禪源諸詮集序 卷下

\*倫排＝排綸(弘)＝排倫(明)。\*勸＝次勸(弘)(明)。\*今欲＝欲令(弘)。\*交＝友(弘)。\*磨＝摩(明)。以下同。\*因＝因以彼(明)。\*流＝類(弘)(明)。\*卽＝而(弘)。\*迹＝跡(明)。\*其＝其所(弘)(明)。\*嘆＝歎(明)。\*響＝嚮(弘)。\*言＝之(弘)。\*本＝大(弘)。\*内＝内也(弘)＝之内(明)。\*復＝覆(弘)(明)。\*難＝難也(弘)。\*傳＝承(弘)(明)。\*代＝世(弘)(明)。\*二＝三(弘)。\*下＝六(弘)。\*于＝於(明)。\*爲＝得爲(明)。\*孫＝孫也(弘)(明)。\*印＝印一(明)。\*押於＝ナシ(弘)(明)。\*的＝剋的(弘)(明)。\*卷＝卷也(弘)(明)。\*當＝兩(底)。\*倫＝綸(明)。\*緒＝序(弘)。\*縛＝縛也(弘)。\*聞見＝見聞(弘)。\*捧＝明)。\*矣＝也(明)。\*序＝都序(弘)(明)。\*下＝下之二(明)。

(1) だが、この著の編集においては、配列の順序次第が容易ではない。入道の便宜に従うならば、まず本心を開き、次に理・事を明らかにし、その次に法のすばらしさを賛嘆して世間の過ちを非難し、さらに修行を勧め、そして最後に迷いに対処する方便と漸次の修業階程を示すべきなのであろう。だが今この順序に従つて編集しようとすると、師から弟子への序列が逆になってしまい、上下互いに穩当を欠くことになる。たとえば六祖の後はほとんどが一真実を述べていて、逆に達磨大師の方が四行の方便をおしえているのだが、だからといって法孫を巻頭に置き、始祖を末篇とする訳にはいくまい。数日の間この事を考えて、達磨の正系以外の人を巻頭に置こうかとも思つたけれども、しかし又たそれらの諸家が教えている禅や述べている理は、代々の師とすべき普遍的・恒常的道ではない。或るものは修行の功なつて証を得、それを人に示したのであり(求那、慧稠、臥輪など)、或るものは聖典を読んだり聴いたりして解を得、それで大衆を集めたのであり(慧闡禪師など)、或るものは仮の姿をあらわしつつ本性に合致し、一時期において群迷を策励したのであり(志公、傅大士、王梵志など)、或るものは高く節操を保つて法を守り、國じゅうの僧侶に軌範を与えたのである(廬山の遠公など)。かれらの著述は、或いは至上の道を詠歌したり、或い

んば、即ち願わくは諸々の同縁と共に、速<sup>すみやか</sup>に諸仏の会に会せんことを。

は迷える凡夫を嘆いたり、或いは専ら義を解釈するだけだつたり、或いは逆に専ら修行に励むだけだつたり、或いは諸教を網羅するだけで結局は方向づけを与えていなかつたり、或いは逆にある教派を一面的に賛美するだけで、諸々の宗派に通じていなかつたりしている。これらは皆な禪門の反映、仏法の一端ではあつても、もしも終始一貫これらを釈迦の法と見なすならば、いまだ十分とは言えないものである（言葉による天台の教えは、広範で根本的であり、全体性をそなえてはいるが、やはりこの集の内にはないのである）。心で嗣<sup>でし</sup>に伝えるのは達磨の正統だけであり、心は法の源なのだから、いかなる法も備わらないことがない。そこで修される禪行は一派に限定されるように見えるが、しかし、そこに伝えられる心宗は、実は三学を通貫しているのである。ましてその始めを尋ねると（始めとは迦葉、阿難をいう）、釈迦から教えを直接に受け、代々相伝し、一人一人に面授され、三十七世して（インドに已に二十八祖がある）と言うものもいる。以下の祖師伝の序の中で詳細に解明する、吾が師（遂州道円）に至つたものなのである（遙かに思うに、わたしは何の幸いによつてか、釈迦三十八代の嫡孫に連なるものである）。

（2）それ故に今、編集の次第としては、まず達磨の一宗を収録し、次に諸家の雑述を編集し、その後に宗旨を印証する聖教を筆写するのである。聖教を後に配置したのは、世間の役所の書類が、下位の役人の判<sup>はん</sup>を先にし、高官の判を後に押すようなものである（ただ文の明らかなもの十余巻を書き取つてはいるにすぎない）。当宗（達磨の正統）の中では、尊と卑の序列に従い、一代ずつ順序を定め、しかるべき秩序となす。その中では「頓」と「漸」とが互いに交錯し、「理」と「行」とが互いに絡み合い、順次に束縛を解いていつて、心は自然と住まる所が無くなるのである（『淨名經』に、「禪味を貪りそれに執着するのは菩薩の束縛である。方便によつて生まれるのは菩薩の解放である」と言つている）。又た『瑜伽論』に、「慈悲と智慧が増して、互いに束縛が解かれる」と説いている。かくして「悟」と「修」の道が完備すれば、「解」と「行」とがそこで円通する。次にその傍に諸家を覽て見聞を広くし、その後に聖教を拝読して、終始一貫していふことを確認するのである。これによつてこそ正法が永久に存続しうるのではないか。その他の志においては何も求めるものは無いけれども、しかし法を護る心だけは神妙の道理にも屈服させられるはずはなく、法を繼ぐ力だけは先の祖師にも見捨てられるはずはなく、法施の恩だけは後學に無にされるはずはないのである。そのように無にされず屈服させられず見捨てられぬものでありますとすれば、有縁の方々と共に、速やかに諸仏の法会に集いたいと願う次第なのである。

- (1) 結集＝一般には釈尊の遺教を整理し、編纂するため合誦したこと(梵 sangiti)を指す。後の注(17)参照。だが、ここでは『諸詮集』の編集を意味する。
- (2) 昭穆＝廟の順序を言い、「周礼」春官、小宗伯に「五常を四郊に兆し、廟祧の昭穆を弁ず」(『十三經注疏本』卷一九一一丁右左)とある。また、『続高僧伝』卷八の慧遠章に「又た七廟を以て非と為して將に廢せんと欲わば、則ち是れ祖考を尊ばず。祖考を尊ばざれば、則ち昭穆序を失う。昭穆序を失わば、則ち五經用いること無し」(大正五〇一四九〇b)とある。
- (3) 六代の後……=三〇段に六代の相伝の一心を伝えることを示す。
- (4) 四行＝『達摩大師四行論』にいう報怨行、隨縁行、無所求行、稱法行をさす。柳田聖山『達摩の語録』(筑摩書房)三二頁参照。『宗鏡錄』卷四二にも「馬鳴祖師は、唯心の一法を標すと雖も、開いて真如と生滅の二門を出す。達磨は直に一心を指すも、隨縁と無礙の四行を建立す」(大正四八一六六三b)とある。
- (5) 通方の常道＝「通方」は普遍的の意。『景德伝燈錄』卷一六の上藍令超章に「問う、善財は文殊に見えて却に南方に往く、意は如何。師曰く、学は入室に憑るも、知は乃ち通方なり。曰く、為什麼に弥勒は文殊に見えしむや。師曰く、道広くして涯無し。人に逢うも尽さず」。(禪文化本三二一頁)とある。また、「常道」は恒常不變の道の意で、『老子』第一章に「道可道、非常道」と見える。
- (6) 求那＝一二段の注(10)の求那跋陀羅を参照。
- (7) 稠那＝同。
- (8) 臥輪＝詳伝は不明。柳田聖山『初期禪宗史書の研究』(前掲者、六七〇八頁)によれば、元來は淨土系の禪者であるが、『楞伽師資記』の求那跋陀羅の言葉の前半は「臥輪禪師看心法」(スタイン一四九四号)に一致するという。また、『伝燈錄』卷五の神会章に言う「臥輪禪師偈」(スタイン六六三一号に一致する)の存在も指摘されている。
- (9) 慧聞禪師＝中國天台宗の南嶽慧思の師、慧文のこと。北齊の人、俗姓は高氏。「摩訶止觀」卷一上に「南岳は慧文禪師に事う。齊高の世に當つて、河淮に獨歩し、法門は世の知る所に非ず、地を履み天を戴きて高厚を知ること莫し。文師の用心は一に『釋論』(＝『大智度論』)に依るなり。論は是れ龍樹の説く所なり」(大正四六一b)とある。『続高僧伝』卷一七の慧思伝に慧文に師事した経過を示すが(大正五〇一五六二c)、詳しい伝は判らない。
- (10) 志公＝保誌(四一八一五一四)、宝誌ともい、誌は志とも書く。俗姓は朱氏、金城(陝西)の人。幼くして出家し、建康の道林寺にとどまり、僧儉に師事して和上となる。奇行が多くあり、讖言の的中によつて大衆から尊崇された。梁の武帝は時人を惑わすもの

として投獄したが、讞言がまたも約中して、武帝に迎えられた。天監一三年冬示寂。世寿九七。『高僧伝』卷一〇に伝あり。著述として『十二時歌』（『景德伝燈錄』卷二九）『大乘讚』（同）『十四科頌』（同）などが伝えられる。『高僧伝』卷一〇に伝あり。宗密も『大疏』卷中二に「故志公云、以我身空諸法空、千品万類悉皆同」（前掲書一一五一左下）とか、「大疏鈔」卷二下に「故志公云、無為大道快樂、衆生不解修錯。不逢出世明師、未服大乘法葉、云々」（同一二四七左上）と偈を引用する。柳田聖山『初期禪宗史書の研究』（前掲書一二六六頁）では、宗密などに引かれるのが初見とする。

(11) 傳大師＝傳龜（四九七一五六九）、善会大師と呼ばれる。居士として尊崇され、弥勒の應身といわれ、神異の伝説が多く伝えられている。太建元年四月二四日示寂。梁の武帝は大同六年（五四〇）に金陵の双林寺を建て、傳大士を迎える。世寿、七三。『双林寺善慧大師語錄』二卷や『頌金剛經』（大正卷八五所收）が伝えられている。五九段の注(1)参照。『心王銘』（『景德伝燈錄』卷二九）『行路難』二十篇（『語錄』所收）も独立して流行し、特に『獨自詩』（『語錄』所收）の「獨自作問我心中何所著、推檢四運併無生。千端万緒何能縛」（統藏卷一二〇一十三左上）の一句は、湛然の『止觀輔行伝弘決』二之三（大正四六一九七b）や『止觀義例』上（同一四五二c）に引用されて有名である。また、柳田聖山氏の前掲書には、傳大士の偈が『楞伽師資記』神秀章に引用されていることが指摘されている。また、柳田『初期の禪史I』（筑摩書房）の『楞伽師資記』の道信章によれば、道信は「守一不移」の説を傳大士によつて説いたとする（同一二二五頁）。さらに、宗密も『大疏鈔』卷七上に「傳大士云、未有無心境、曾無無境心。境亡心亦滅、無境亦無心」（同一三四四右上）の偈を引く。『統高僧伝』卷二十五に伝がある。年次等が詳しいのは『善慧大士語錄』であるが、その中には後世の伝承も含まれている。

(12) 王梵志＝伝記は不詳。入矢義高「王梵志について」（『中国文学報』第三、四冊、一九五五年一〇月・一九五六年四月）、及び「王梵志詩集攷」（『神田博士還暦記念書誌学論集』所收、一九五七年一一月）にその詩がまとめられる。敦煌本としてS七七八・S一三九九・S二七一〇・S三三九三・S四二七七・S四六六九・S五四四一・S五四七四・S五六四一・S五七九四・S五七九六・S六〇三二・P二一二五・P二七一八・P二九一四・P三二二一・P三二六六・P三五五八・P三六五六・P三七一六・P三八二六・P三八三三・李氏鑑氏所藏本等があり、大正藏八五にS七七八が活字化されている。今、項楚『王梵志詩校注』（上海古籍出版社、一九九一年）が具わる。

(13) 廬山の遠公＝二六段およびその注(21)には『達摩多羅禪經』の翻訳者として登場する。慧遠（三三四一四一六）、俗姓は賈氏。二一歳で出家し、道安に従つて大乗經典を学ぶ。世乱れて道安が衆を散じた為に廬山に避け、同門の慧永に廬山西林寺に迎え入れられた。その後、東林寺が建立されて迎えられ、三十餘年にわたつて白蓮社を結んで、戒を守り淨業念佛を修した。元興三年（四〇四）、垣玄（かんげん）が沙門といえども君主を抨すべきであると求めたのに対し、『沙門不敬王者論』をもつて反論し、仏教の出家修行者の立場を守

つた。長安に迎えられた鳩摩羅什に親好を求め、両者の往復問答が、のちに『大乗大義章』としてまとめられている。義熙一二年八月六日示寂す。世寿八三。『高僧伝』卷六に伝あり。また木村英一編『慧遠研究』遺文篇・研究篇(創文社一九六〇・六二)がある。

(14) 天台の言教……四段およびその注(17)(18)(19)に示したように、宗密は天台の三諦の理や三止三觀の説を最も円妙な教義と認めながらも、それを四禪八定の禪と限定していた。ここも天台の教義の広大さを認めた上で、抑下したもの。

(15) 心宗=六段およびその注(15)に既出。六段とこここの段とは深く関連しているし、三段、四段とも密接な関係がある。

(16) 過去=一段の注(3)に既出。

(17) 阿難=八段の注(21)参照。前注の摩訶迦葉の釈につづいて、「大疏鈔」卷三下(同一二七五左下～二七六右上)に次のようによく語る。「（へ然るに『禪經序』の文に云く、此れは是れ阿難、曲て旨詔を承け、過は其の人に非ず。則ち幽闇闢くこと莫く、其の庭を窺うこと罕なり。若し能く意を得て言を忘れば、則ち途中に授与す。此に拠らば即ち仏は阿難に属す。又た『智論』に説く、阿泥樓豆、阿難に語りて言く、仏の旨は汝に法を付すに、汝今ま愁悶して付する所の事を失う。又た仏は般涅槃の時に迦葉在らず。亦た合にはれ阿難なるべきに似たり。今ま此の經及び伝記、法眼の相付を述ぶるに、皆な迦葉を以て初祖と為すは、應に是れ先に仏の密属を受け、然して山中に住すべし。後に仏、涅槃に臨んで再び阿難に属して迦葉に語らしむ。當に仏法の主たるべし。及び阿難をして同じく法藏を結集せしむ。迦葉を初と為すなり。疏に今に展転する等とは、西域二十八祖、此方の七祖、相承して伝法し、一燈の百千燈を照し、冥きものは皆な明となり、明の終に尽きること無きが如し。燈を伝えるの喻えは、『淨名經疏』に説くが如し。然して初めの五師とは、謂く、迦葉、阿難、末田地、商那和修、優婆毘多なり。阿難は第二なり。故に『付法藏經』に云く、迦葉、涅槃せんと垂る時、最勝法を以て阿難に付囑す。而して是の言を作さく、長老、當に知るべし、昔、婆伽婆、法を以て我に付す。我が年老朽して將に涅槃せんと欲るに、世間の勝眼もて今ま相い付囑せんと欲。汝は精勤して斯の法を守護すべし。阿難曰く、諾。唯然として教を受く、云々。阿難、妙法を演暢し、諸の衆生を化す。化縁將に畢らんとするに、先ず罽賓の比丘、末田提と名づくるを度す。又た迦葉の涅槃せんと垂とする時を念い、告げて云く、長老、後において若し涅槃に入らば、王舍城に一長者り、商那和修と名づく。高才勇猛にして大智慧有り。度して出家せしめ法を以て之に付すべし。阿難、般涅槃に臨んで告げて曰く、仏は法眼を以て大迦葉に付す。迦葉は我に付す。我今ま汝に付す。汝、守護して諸の衆生を度すべし。答えて曰く、教を奉じて我當に擁護して、普く一切の為に大明炬と作るべし」。なお、『略疏鈔』卷四(續藏卷五一三〇左下)も参照。

(18) 下の祖伝の序=朝鮮本は「六祖伝序」を作る。『裴休拾遺問』にも、達磨直系の『伝記』を論じた書(前掲論文二二頁)とか『祖宗伝記』(同二四頁)があつたとするから、不伝の書があつたのであろう。その内容はおそらく『大疏鈔』卷三下の修証門に近いものであつたと推測される。

- (19) 釋迦三十八代＝28達摩—29慧可—30僧璨—31道信—32弘忍—33慧能—34荷沢神會—35磁州智如—36荆南惟忠—37遂州道円—38宗密となる。宗密自身の主張する伝法系譜については、小川隆「宗密伝法世系再考」（『禅文化研究所紀要』二四号・一九九八年）参照。
- (20) 当宗＝底本は両宗に作り、両宗とは達磨の正統と諸家のことを指すか。但し、文の流れからは通じないので諸本に従つて改めた。
- (21) 「淨名」に……＝『維摩經』文殊師利問疾品(大正一四一五四五b)による。
- (22) 「瑜伽」に……＝出典未詳。

## 〔五九〕 後記

保壽尼寺檀越菩薩戒尼大友惣持、施賤命工、刊行此版。伏願人人肅清慧目、個々開悟靈心、恩有報資、怨親融接。延文戊戌春、雲居比丘妙葩題。

保壽尼寺檀越菩薩戒尼大友總持<sup>(1)</sup>、財を施し工に命じて、此の版を刊行す。伏して願わくは、人人、慧目を肅清し、個々、靈心を開悟して、恩に資を報ずる有り、怨親融接せんことを。延文戊戌(一三五八)の春、雲居比丘妙葩題す。<sup>(2)</sup>

保壽尼寺の檀越であり菩薩戒を受けた尼である大友總持が、財を布施して刻工に命じ、この版を刊行する。全ての人々が智慧の目を清め、一人一人が靈心に目覚め、仏恩に報じ、怨も親も互いに打ち解け合わんことを、伏して願う。延文戊戌(三年。一三五八)の春、雲居比丘妙葩題す。

(1) 保壽尼寺檀越菩薩戒尼大友總持＝不詳

(2) 雲居比丘妙葩＝妙葩(一三一一一三八八)、号は春屋。雲居とは、天龍寺の雲居庵をいう。甲斐(山梨県)の人で、夢窓疎石の甥に当る。俗姓は平氏。「智覺普明國師行業実録」(『続群書類從』九輯下一卷二三八所収)によれば、正中二年(一三二五)に夢窓の手度の弟子となり、後に嗣法す。「普明行業」によれば、貞和元年(一二四五)に天龍寺の雲居庵主となる。觀応二年(一三五二)九月三〇日、夢窓の示寂に逢う。延文二年(一三五七)、春屋は師の七回忌を天龍寺で修し、その功により足利尊氏より等持寺に住持せしめらる。翌三年、天龍寺が火災に罹り、春屋は造営の幹事となつて復興す。康安元年(一三六一)に臨川寺も火災となり、この寺もまた復興す。

貞治二年（一三六三）に天龍寺、ついで康暦元年（一三七九）に南禪寺に往す。嘉暦一年八月一二日示寂。世寿、七八。諸禪籍の刊行に尽力す。雲居庵は夢窓の寿塔のあつたところで、後にその塔所となつた。この「都序」の開版の時には、雲居庵主をも兼ねており、とくに夢窓を慕つて「雲居比丘」と称したものと思われる。玉村竹二「五山禪僧伝記集成」（講談社）一九〇頁以下参照。

## 〔参考〕

### （1）弘治本「後記」

唐大中十一年丁丑歲、裴相親筆寫本、付與金州武當山太一延昌寺老宿、得五十年收掌。大梁壬申、老宿授與唯勁禪師歸湖南。又得廿三年至甲午、禪師授與契玄歸閩。又經廿二年至甲寅・乙卯、賣入吳越、書寫施行矣。

福州沙門契玄錄

大宋錢塘嚴明男嚴楷勾當雕開板。

唐の大中十一年丁丑（八五七）の歲、裴相<sup>(1)</sup>、親筆の写本、金州武當山の太一延昌寺<sup>(2)</sup>の老宿に付与し、五十年を得て收掌したり。大梁の壬申（九一二）、老宿、唯勁禪師<sup>(3)</sup>に授与して湖南に帰れり。また廿三年を得て甲午（九三四）に至り、禪師、契玄<sup>(4)</sup>に授与して閩に帰る。又た廿二年を経て甲寅（九五四）乙卯（九五五）に至り、賣<sup>(5)</sup>して吳越に入り、書寫して施行したり。

大宋、錢塘の嚴明の男、嚴楷<sup>(6)</sup>勾當、雕して開板す。

福州沙門の契玄錄す。

（1）裴相＝裴休（七九一—八六四）のこと。一段およびその注（2）参照。

（2）武當山……陝西省にあり。「宋高僧伝」卷九の唐均州武當山慧忠伝に次のように言う。「常に思大師の言えること有るを以う。若し道を得んと欲せば、衡嶽、武當なり、と。国に奏して武當山に請うて太一延昌寺を置き、白崖山党子谷に香巖長寿寺を置かしむ。各おのに藏經一本を請う」（大正五〇一七六三a）。

（3）唯勁禪師＝惟勁とも書く。福州長溪の人。雪峰義存（八二三—九〇八）の法嗣。乾化（景德伝燈錄は光化に作る）中（九一一九一五）、南嶽に入り報慈東藏（三生藏ともいう）に住す。法藏が製作した「鏡燈」に対して「五字頌五章」を著わしたという。特に注目される

のは、貞元（七八五—八〇五）中に撰述された『宝林伝』の後を承けて、開平中（九〇八—九一〇）に『続宝林伝』四巻を撰述したとされていることである。また七言の「覺地頌」や『南嶽高僧伝』を著わし、流布したと伝えられるが、残念ながら多くは逸書となってしまっている。『宋高僧伝』卷一七に伝あり。

- (4) 契玄＝伝不詳。  
 (5) 嚴明の男、嚴楷＝伝不詳。勾当は官名。

## (2) 弘治本「跋」

竊嘗聞之、眞性本無衆生、衆生緣乎妄見。如來本無言教、言教爲乎有情。妄見者衆生之病、言教者如來之藥。以藥治病、則病無不治。以言覺妄、則妄無不覺。是以雙林大士、聚言教以爲寶藏、唯我密師集禪偈而爲都序。以教依論、則教流而無礙、以論顯教、則論運以無窮。使披其教者、理悟變通、見其論者、心不退轉。大叟閑游海藏、幸遇禪源、欲意思之、廣宣流布。利國利人、積有年矣。今有道侶發大誓願、廣化檀緣、鏤板印施。俾一國一見一聞、皆結勝因、畢竟同成正覺。此吾所望之大義歟。大叟謹跋。

弘治六年癸丑七月有日、全羅道高山地佛名山花岩寺重刻

ひそかに嘗つて之れを聞く。眞性には本より衆生無く、衆生は妄見に縁ぜらるのみ。如來には本より言教無く、言教は有情に為らるるのみ。妄見は衆生の病、言教は如來の薬なり。薬を以て病を治せば、則ち病い治せざる無し。言を以て妄を覺せば、則ち妄は覺さざる無し。是を以て双林大士、言教を聚めて以て宝藏と為し、（1）唯だ我が密師、禪偈を集めて而して『都序』を為れり。教を以て論に依らば、則ち教は流れ而して無碍、論を以て教を顯わせば、則ち論は運りて以て無窮なり。其の教を披く者をして、理に変通を悟らしめ、其の論を見る者に、心、退転せざらしめん。（2）大叟（3）海藏（4）閑游し、幸いに『禪源』に遇い、意、これを思いて広宣流布せんと欲す。国を利し人を利するは、積むに年有り。今、道侶有りて大誓願を発し、広く檀縁を化し、板を鏤して印施したり。一国をして一見一聞せしめ、皆な勝因を結び、畢竟して同じく正覺を成せん。此れ吾が望む所の大義なるか。（5）大叟（6）謹みて跋す。

弘治六年癸丑（一四九三）七月有日、全羅道高山地仏名山花岩（華嚴？）寺重刻す。

(1) 双林大士||傅大士(四九七—五六九のこと。五八段の注(11)参照。なお、傅大士は天監一年(五一二)の一六歳の時に、劉妙光と結婚し、普建と普成の二人の子が生まれた。傅大士は大蔵經の閲覧の便を計り、一柱八面の輪藏を創建したと伝えられる。後に寺院に立てられる輪藏には、創始者としての傅大士像が設けられ、普建と普成の二子がさらに安置されることもあるという。この跋もその伝承を踏まえている。永井政之「傅大士信仰」(『中国佛教の文化史的研究―中国禅宗教団と民衆』所収、内山書店、近刊予定)参照。

(2) 大叟||跋の撰者については不詳。

(3) 海藏||大蔵經をさす。『宗鏡錄』の錢倅の序に「我が仏の金口の宣ぶる所は、海藏に盈つ」(大正四八—四一五〇)とある。龍藏ともいう。一四段の注(14)参照。『鼓山和尚法堂玄要廣集』に「若し自ら具眼せざれば、人に就いて揀弁し、卷子裏に抄し、冊子裏に写す。仮饒たとい百千万句、龍宮の海藏を一時に呑納するも、尽く是れ他人にして、自己に干らず、亦た喚んで識学依通と作す」(柳田聖山主編『古尊宿語要』卷四一・一九〇頁、中文出版社)とある。

(4) 『禪源』||『都序』をさす。

(5) 跋す||東洋文庫本の万曆四年版にも同じ跋が存し、「時萬曆四年丙子夏、俗離山觀音寺開板」とある。なお、朝鮮版の『都序』の開版については、黒田亮「禪源諸詮集都序に就いて」(『朝鮮旧書考』所収、岩波書房、一九四〇年二月二二日)参照。

(6) 弘治六年……||この版も重刻であるが、初版の事情については不明である。なお、原文は「花岩寺」とあり、この寺については未検。また、原刻には多くの助縁者が付されている。

### (3) 明藏本「識語」

徽州居士吳繼勲（1）、教門の広大なるを慕い、末法の衰頽を愍み、賛を施して此を刻す。禪源諸詮集卷下の二（2）。願くは蚤（3）に一乗を悟り、深く仏果を証り、教海の波瀾を揚げ、沙界に徧周く、人天の眼目と作して、広く含靈を度さんとする者なり。

平湖釋在照對。南昌萬承明書。上元許一科刻。萬曆丁未十一月、寂照庵識。

徽州居士吳繼勲（1）、教門の広大なるを慕い、末法の衰頽を愍み、賛を施して此を刻す。禪源諸詮集卷下の二（2）。願くは蚤（3）に一乗を悟り、深く仏果を証り、教海の波瀾を揚げ、沙界に徧周く、人天の眼目と作して、広く含靈を度さんとする者なり。

平湖の釈在照對す。南昌の万承明書す。上元の許一科刻す。万曆丁未（一六〇七）十一月、寂照庵（6）にて識す。

- (1) 徽州居士吳繼勲＝伝不詳。
- (2) 下の二＝四巻本の明藏本には、それぞれ「上之一」「上之二」「下之一」とある。
- (3) 稹在照＝伝不詳。
- (4) 万承明＝伝不詳。
- (5) 許一科＝伝不詳。刻者名は、それぞれ涇県の汪文旦、江寧の羅仕頤、上元の許一科となり、巻下の二巻は許一科が刻つたことになる。
- (6) 寂照庵＝『徑山志』巻一二（『中国仏寺志32』所収、明文書局、一九八〇年一月）に見える寂照庵のことか。

#### (4) 明藏本「無外惟大序」

##### 重刻禪源詮序

道不能自鳴、假人而鳴。鳴雖不同、道則未嘗不同也。苟不同、不足以爲道。如仲尼之一貫、老聃之無爲、釋氏之空寂、人異道同、此其證也。況夫禪教兩宗同出於佛。禪、佛心也。教、佛口也。豈有心口自相矛盾者乎。奈何去聖時遙、師承各異。教者指禪爲暗證、禪者目教爲漸修、明暗未得其公、頓漸罔知攸定。迭爲詆毀、殆若仇讐。非但鼓之空言、抑且筆之簡冊。世道日下、弊將何如。昔圭峯禪師患之、遂將教禪諸祖著述章句旨意相符者、集爲一書、名曰禪源諸詮、以訓于世、將使兩家學者、知一佛無二道、四河無異味。言歸于好、永無敗盟。源詮之功、豈易量哉。予每見南方此弊尤甚、安得人有是書、一洗舊習、咸與惟新。興念至此、未嘗不廢食而歎也。今雪堂總統大師、若有所契、特捐衣長、復新諸梓、以廣流傳。千里走書、俾爲序引。裴公相國既述于前、自視何人敢此凌轢、以貽諸者之誚。然而此書平生所愛慕者、何幸挂名其間。故不讓也。

大德七年七月、住崑山薦嚴無外惟大序。

##### 重ねて禪源詮を刻する序

道は自ら鳴ること能わず、人を假りて而して鳴る。鳴ることは不同なりと雖も、道は則ち未だ嘗て不同ならず。苟くも不同ならば、以て道と為すに足らず。仲尼の一貫、老聃の無爲、稟氏の空寂の如き、人異なれど道同じきは、此れ其の証なり。況んや夫の禪教両宗の同じく仏より出づるをや。禪は仏心なり、教は仏口なり。豈に心と口と自ら相い矛盾する者有らんや。奈何いかん

せん、聖を去ること時遙かにして、師承の各々異なるを。教者は禪を指して暗証と為し、禪者は教をして漸修と為し、明と暗と未だ其の公を得ず、頓と漸と定まる攸を知ること罔し。<sup>な</sup>迭に詆毀を為すこと、殆ど仇讐の若し。<sup>ただ</sup>但に之を空言に鼓つの章句の旨意の相い符するものを將つて、集めて一書と為し、名づけて禪源諸詮と曰い、以て世に訓え、將て両家の学者をして、一仏に二道無く、四河に異味無きを知らしめんとせり。言は好に帰して、永く敗盟無し。源詮の功、豈に量り易からんや。予毎に南方に此の弊尤も甚しきを見る、安んぞ人の、是の書を有ち、旧習を一洗して、咸与に惟れ新なるを得んと。念を興して此に至り、未だ嘗て食を廃して歎ぜざるはあらず。今、雪堂總統大師<sup>(1)</sup>、契う所あるが若く、特に衣長を捐てて、復び諸を梓に新にし、以て流傳を広くす。千里書を走せて、序引を為らしむ。裴公相国既に前に述べたれば、自ら視<sup>きつ</sup>するに、何人か此の凌蹠を敢てして、以て識者の誚<sup>そしり</sup>を貽さんや。然れども此の書は平生愛慕する所、何の幸か名を其の間に挂く、故に譲らざるなり。

大徳七年(一二〇三)七月

崑山薦嚴寺に住する 無外惟大<sup>(2)</sup>序す

- (1) 雪堂總統大師＝普仁(生没年不詳)。字は仲山、号を雪堂という。俗姓は張氏。許昌(河南省)の人。父は世榮、豐州司錄参軍となる。母は夾谷氏。寿峰湛老の下で得度し、竹林雲和尚の下で具戒す。後に永泰賛公に参じた。永泰賛公は「見して普仁」をすぐれた人材と認め、印可を許し、嗣法させた。王博文撰「真定十方臨濟慧照玄公大宗師道行碑銘」(柳田聖山主編『臨濟錄抄書集成 下冊』所収『臨濟錄摘要』八—三九丁左～四〇丁右)に依ると、普仁の師の永泰賛公は、臨濟宗の汾陽善昭—瑠琊慧覚—泐潭曉月—毘陵真—白水白天寧党—慈照純—鄭州宝—少林鑑—法王通—安閑覺—西庵贊と承けると伝える。「碑銘」にのみ伝えるもので、この系統は燈史類では見出せない。得度の師の寿峰湛老も近い法系で、同じ「碑銘」の中に、安閑覺—南京智—寿峰湛と承けると記している。至元九年(一二七二)に庵を結んで後の至元二年(一二八四)天慶寺は大道場となり、至元二三年に完成した。至元二四年八月まもなく立石されたのが先の碑銘であり、「前江淮福建等處釈教總統十八世孫雪堂野衲普仁立石」と記されている。王憲撰「大元國大都創建天慶寺碑銘」(『秋澗大全集』卷五七所収)に伝がある。
- (2) 無外惟大＝伝不詳。

## (5) 明藏本「鄧文原序」

### 重刻禪源詮序

禪源詮者、唐圭峯禪師之所作也。佛之道、廣周法界而細入微塵、非有非空、無內無外。後之學禪者、志窮實相、以言語爲苛纖、設教者、務覈真詮、以空寂爲誕肆、離爲異門、莫能統一。豈佛之道本然哉。於是以教三種證禪三宗、謂依性說相卽息妄修心、破相顯性卽泯絕無寄、顯示真心卽直明心性。江漢殊流而同歸智海、酸鹹異調而共臻禪味。至於空宗性宗之別、頓修漸修之殊、莫不會其指歸開示正覺。然又慮末學之易惑而難悟也、則又旁行爲圖、朱墨以志之、自頓覺至成佛、十重爲淨、自不覺至受報、十重爲染。淨染之源、由於聖凡心法悉具真妄、是名藏識。不覺則迷真逐妄、歷劫輪迴。頓覺則舍妄歸真、隨順解脫。雖然、學者要知眞如闡教、如標月指。若復見月了知所標畢竟非月、則詮圖兩忘、愚智通爲般若、垢淨俱證菩提。南岳天台、南侁北秀、與達磨東來宗旨無有差別。尙何禪與教之分哉。唐大中時、裴相國休爲之叙、復手書是圖、付金州延昌寺。後傳唯勁師、再傳玄契師而圖行閩湘吳越間。國朝至元十二年、世祖御廣寒殿、願問禪教要義、帝師及諸耆德以禪源詮對。上意悅、命板行於世。後二十有九年爲大德癸卯。嗣法雪堂仁禪師、奉旨之五臺、回途過大同、得金時潛菴覺公禪師所書圖、益加攷訂、鋟梓以傳諸遠、俾圭峯禪師研眞顯正、化導羣迷之意、永久不墜。其爲利益、何可稱量。文原與師爲方外交、乃隨喜讚歎、爲之次序其說、書諸編首。

是歲閏月朔、應奉翰林文字將仕佐郎同知制誥兼國史院編修官、巴西鄧文原書。

### 重ねて禪源詮を刻する序

禪源詮は唐の圭峯禪師の作る所なり。仏の道は広く法界に周<sup>あま</sup>ねく、而も細にして微塵に入り、有に非ず空に非ず、内無く外無し。後の禪を学ぶ者は、実相を窮むることを志して、言語を以て苛纖と為し、教を設くる者は真詮を覈することを務めて、空寂を以て誕肆と為し、離れて異門と為つて、能く統一すること莫し。豈に仏の道本<sup>もと</sup>より然らんや。是に於て、教の三種を以て禪の三宗を証す、謂く、依性説相は即ち息妄修心、破相顯性は即ち泯絶無寄、顯示真心は即ち直明心性なり。江と漢と流を殊にするも同じく智海に帰し、酸と鹹と調を異にするも共に禪味に臻<sup>あつ</sup>まる。空宗性宗の別、頓修漸修の殊に至りては、其の指帰を会して正覚を開示せざるは莫し。然して又た末学の惑い易くして悟り難きを慮るや、則ち又た旁行して図と為し、朱墨以て

之を志し、頓覺より成仏に至る十重を淨と為し、不覺より受報に至る十重を染と為す。淨染の源は聖凡の心法の悉く真妄を具するに由る、是れを藏識と名づく。不覺なるときは則ち真を迷<sup>みうしな</sup>いて妄を逐<sup>お</sup>い、歴劫輪廻す。頓覺するときは則ち妄を捨てて真に帰し、隨順解脱す。然りと雖も、学者は真如の闡教の月を標<sup>しあ</sup>す指の如くなるを知ることを要す。若復し月を見て所標は畢竟月に非ずと了知せば、則ち詮と図と両ながら忘じ、愚と智と通じて般若と為り、垢と淨と俱に菩提を証せん。南嶽天台、南侁北秀、達磨東來の宗旨と差別あること無けん。尚お何ぞ禪と教との分あらんや。唐の大中の時、裴相國休、之が叙を為り、復た是の図を手書して、金州延昌寺に付したり。後に唯勁師に伝わり、再び玄契<sup>(ママ)</sup>師に伝わり、而して図は閩湘吳越の間に行わる。国朝至元十二年(一二七五)、世祖、廣寒殿に御し、願つて禪教の要義を問うに、帝師及び諸の耆德は禪源詮を以て対えたり。上、意悦して、世に板行することを命ず。後二十有九年にして大德癸卯(一三〇三)と為る。嗣法の雪堂仁禪師<sup>(1)</sup>、旨を奉じて五臺に之き、回り途に大同を過ぎて、金時の潛庵覺公禪師の書せし所の図<sup>(2)</sup>を得、益々攷訂を加え、梓に鋟みて以て諸を遠きに伝え、圭峯禪師の真を研め正を顯わして群迷を化導するの意をして、永久に墜ちざらしむ。其の利益たるや、何ぞ称量すべけんや。文原<sup>(3)</sup>師と方外の交を為したれば、乃ち隨喜讚歎し、之が為に其の説を次序し、諸を編首に書す。

是の歲閏月朔、應奉翰林文字將仕佐郎同知制誥兼國史院編修官、巴西の鄧文原書す。

(1) 雪堂仁=普仁。前の無外惟大序の注(1)参照。

(2) 潛庵覺公=伝不詳。

(3) 鄧文原=文原(一二五九—一三二八)、字は善之、匪石と号す。綿州(四川省)を本貫とし、杭州の人。博学にして書を善くす。官はじめ杭州路儒學正となり、進んで翰林待制となる。さらに江南浙西康訪司僉となり、讞獄明允と称される。至治中(一三二一)一三二三に集賢直學士・兼國子祭酒を挙す。致和元年没す。世寿、七〇。『元史』一七二に伝あり。『元人傳記資料索引』三一一九一  
一頁参照。

## (6) 明藏本「賈汝舟序」

## 重刻禪源詮序

雪堂禪師、智識雄邁、行解圓通、喜修爲、樂施與。一日謂余曰、愚嘗患世之學佛者不究如來設教之因、妄執空有、競分大小、曰頓曰漸、曰禪曰律、譬譬紛紛千數百年、如護父足使具受病。雖遇一二同志有以啓之、恨不能家喻而戶曉也。幸得圭峯所述禪源詮、其文博雅、其旨切當、悉叙前所患者、道其所以然、且作圖示心一眞實諦、含三大義、無明緣染、諸相妄起、依修斷法、獲證入理、提綱舉要、如指諸掌。昔至元十二年春正月、世祖皇帝萬機之暇、御瓊華島、延請帝師。太保文貞劉公亦在焉。乃召在京耆宿、問諸禪教乖互之義。先師西菴贊公等八人、因以圭峯禪源詮文爲對、允愜宸衷。當時先師囑其弟雙泉泰公爲之記、仍命雪堂鏤板流行。愚以參問諸方、未暇及此、向於雲中普恩興國二寺、各獲一本、後在京萬壽方丈、復得遼朝崇天皇太后清寧八年印造頒行天下定本、與文士較正、擬欲刻梓以傳永久。請叙一言、庸伸先師遺志。余聞之喜曰、今子之心、卽圭峯師憂世之心也。然不有斯文、無以解其惑、不壽其傳、無以利其衆。學者覩之、而情不遣、解不生、亦何益矣。古人所謂四難者、今三難不具。其一則在。諸方參學者、儻能不負二師弘法利人之念、盡心披玩、情遣解生、如王良總六轡馳通衢、阿師駕般若航登彼岸、豈有不達者哉。

## 翰林待制朝列大夫同修國史賈汝舟序。

## 重ねて禪源詮を刻する序

雪堂禪師、智識雄邁にして、行解円通、修爲を喜び、施与を樂<sup>ねが</sup>う。一日余に謂つて曰く、愚嘗て患<sup>わざら</sup>うらく、世の学仏者の如來の教えを設くる因を究めずして、妄に空有に執し、競うて大小を分ち、頓と曰い漸と曰い、禪と曰い律と曰い、譬譬紛紛たること千数百年、父足を護つて、具さに病を受けしむるが如くなるを。一二の同志に遇いて以て之を啓くこと有りと雖も、恨むらくは家ごとに喻<sup>き</sup>し戸ごとに曉<sup>き</sup>らしむ能わざるを。幸に圭峯所述の『禪源詮』を得たるに、其の文博雅にして、其の旨切當、悉く前に患ひし所の者を敍し、其の然る所以<sup>ゆえん</sup>を道い、且つ図を作つて心の一眞實諦にして三大の義を含み、無明、染に縁して諸相の妄に起り、断法を修するに依りて、証を獲<sup>え</sup>て理に入るを示し、綱を提げ要を挙げて諸を掌に指すが如し。昔、至元十二年（一二七五）春正月、世祖皇帝万機の暇、瓊華<sup>(1)</sup>島に御し、帝師を延請し、太保文貞劉公<sup>(2)</sup>も亦た在り。乃ち在京の耆宿を召して、

諸の禪教の乖互の義を問う。先師西菴贊公<sup>(3)</sup>等の八人、因つて圭峯の「禪源詮」の文を以て対を為せるに、允に宸衷に愜えり。當時先師、其の弟たる双泉泰公<sup>(4)</sup>に囑して之が記を為り、仍て雪堂に命じて板に鏤つて流行せしむ。愚、諸方に参問せるを以て、未だ此に及ぶに暇あらざりしが、向に雲中の普恩・興國二寺に於て、各おの一本を獲<sup>(5)</sup>、後に京の万寿方丈に在りて、復た遼朝崇天皇太后の清寧八年(一〇六二)に印造して天下に頒行せる定本を得て、文士と与に較正し、梓に刻して以て永久に伝えんと擬<sup>(6)</sup>欲す。請う一言を敍して、庸<sup>(7)</sup>て先師の遺志を伸べよと。余、之を聞いて喜んで曰く、今、子の心は即ち圭峯師の憂世の心なりと。然して斯の文有るにあらずんば、以て其の惑を解く無く、其の伝を寿<sup>(8)</sup>しうせんば、以て其の衆を利する無し。学者之れを観て、而も情遣<sup>(9)</sup>らズ、解生せんば、亦た何の益かあらん。古人の謂ゆる四難なる者、今ま三難具わらず。其の一は則ち在り。諸方の参学者、儻<sup>(10)</sup>し能く二師の弘法利人の念に負かず、心を尽くして披玩し、情遣り解生ぜば、王良の六轡を總べて通衝を馳せ、阿師の般若の航に駕して彼岸に登るが如し、豈に達せざる者有らんや。

翰林侍制朝列大夫同修国史 賈汝舟序<sup>(6)</sup>す。

(1) 瓊華島＝北海の中に在り。

(2) 太保文貞劉公＝劉秉忠(一一六一—一二七四)、字は仲晦、本名は侃。諡は文正、藏春散人と号す。邢州(河北省)の人。出家し子聰といい、抨官して秉忠と改名した。臨濟宗の海雲印簡(一一〇一—一二五七)と共に世宗に見え、常に帝の顧問となつた。世宗の即位の後に太保を拝す。至元一年没。世寿、五九。『元史』一五七に伝あり。『元人伝記資料索引』三一八四〇頁参照。至大二年(一三〇九)撰「臨濟正宗碑」(前掲の「臨濟錄摘要」所収)および前述の「臨濟大宗師道行碑銘」によると、印簡は、五祖法演—天目齊—汝州嬾牛和—竹林宝—竹林安—竹林容庵海—慶寿中和璋—海雲大宗師印簡と法を相承するという。また、劉秉忠は、印簡—可庵朗と承けて、その孫弟子に当るとする。

(3) 西菴贊公＝伝不詳。雪堂普仁の師に当ることは、無外惟大序の注(1)に述べた。

(4) 双泉泰公＝伝不詳。

(5) 四難＝智顗『法華文句』卷五上により值仏難、説法難、聞法難、信受難をいう(大正三四一六二一〇)。

(6) 賈汝舟＝伝不詳。

## (7) 繼藏経明版「居頂玄極疏」

重刊圭峯禪師禪源諸詮集都序疏

道絕名言、無不含攝。見之過者、執以爲空。見不及者、執以爲有。空有相非、異議籍籍。苟無達士悟其大全、會而通之、則肝膽不相矛盾者、幾希矣。唐圭峯定慧禪師、學該馬龍、禪亞能秀、興大悲智、肆無礙辯、凡華嚴涅槃等經、起信<sup>(マヤ)</sup>惟識諸論、悉皆箋註。又慮諸宗之徒、各私其傳、不究其本、競立門庭、互相詆訾、判大道成異岐、驅後學入疑網、故蒐羅諸家凡言禪者、集爲禪藏、目曰禪源諸詮集、仍都序之。其理奧、其文嚴、其議論公而正、擲大千於方外、納須彌於芥中、深有補於吾教。裴相國稱其鎔鑄盤釵鉤爲一金、攬酥酪醍醐爲一味、可謂知言矣。苾芻某、得此都序、不敢專於己、輒欲重刊之。凡我同志、宜相其成、以永流播。庶幾祖燈並耀於佛日、而教苑同茂於禪林也。

天台釋 居頂 玄極

重ねて圭峯禪師の禪源諸詮集都序を刊する疏

道は名言を絶して、含摂せざるは無し。見の過ぐる者は、執して以て空と爲し、見の及ばざる者は、執して以て有と爲す。空有相い非りて、異議籍籍たり。苟くも達士の其の大全を悟り、会して之を通ずること無くんば、則ち肝胆相い矛盾せざること、幾ど希なり。唐の圭峯定慧禪師、学は馬・龍を該ね、禪は能・秀に亞ぎ、大悲智を興し、無礙の弁を肆にし、凡そ華嚴・涅槃等の經、起信・惟識の諸論、悉く皆な箋註し、又た諸宗の徒の各おの其の伝を私して、其の本を究めず、競うて門庭を立てて、互相に詆訾し、大道を判じて異岐を成じ、後学を駆つて疑網に入らしむるを慮え、故に諸家の凡そ禪を言う者を蒐羅し、集めて禪藏と爲し、目づけて『禪源諸詮集』と曰い、仍て之に都序せり。其の理は奥、其の文は嚴、其の議論は公にして正、大千を方外に擲<sup>(なげう)</sup>ち、須弥を芥中に納めて、深く吾教を補う有り。裴相國<sup>(1)</sup>の其れを鎔鑄盤釵鉤を鎔<sup>(とか)</sup>して一金と爲し、酥酪醍醐を攬して一味と爲すと称するは、謂つべし知言なりと。苾芻某、此の『都序』を得て、敢て己に専らにせずして、輒ち重ねて之を刊せんと欲す。凡そ我が同志は宜しく其の成るを相けて、以て永く流播すべし。庶幾くは、祖燈の耀を仏日に並べ、教苑の茂を禅林に同じくせんことを。

天台の釈 居頂玄極<sup>(2)</sup>

(1) 裴相国の……」一段の「序」およびその注(20)(21)参照。

(2) 居頂玄極＝居頂(？)一四〇四。号を玄極、円極、円庵と号す。台州黃巖の人。俗姓は陳氏。一五歳の時、郷里の淨安寺で出家す。臨濟宗の恕中無愠(一三〇九—一三八六)に参じ、嗣法す。無愠は、虛丘紹隆＝應庵曇華＝密庵咸傑＝松源崇岳＝減翁文礼＝横川行珙＝竺元妙道と承ける。洪武十六年(一三八三)に鄞県の翠山に出世し、金華の双林寺に移る。勅により僧錄司左講經に任せられる。のちに應天府(河南省)の靈谷寺に住す。永樂二年二月一日示寂す。「統伝燈錄」三六卷の撰者であり、明藏の開版に尽力したことで知られている。また「靈谷圓極居頂禪師圓庵集」一〇巻の著がある。明の南藏と居頂の関係については、野沢佳美『明代大藏經史の研究』(汲古書院、一九九八年一〇月三〇日)を参照されたい。

〔補〕高山寺本については、「『禪源諸詮集都序』の訳注研究(三)」「『紀要』五四号、平成八年三月)の末尾に「付記」したように、本研究の途中より調査することを得た。それ以前に対校できなかつた一五段(2)の途中までを、ここに活字用正字をもつて移録する。対照の便の為、本訳注研究に従つて段落と小節を分ち、句読を附しておいた。なお、同本は、高山寺および高山寺典籍文書綜合調査団に特別の許可と撮影をお願いし、その結果、平成七年七月十四日付の撮影資料を手にすることができたものである。北海道大学の石塚晴道教授、東京大学の末木文美士教授をはじめ、関係の方々にここに厚く御礼申し上げたい。

## 〔二〕禪源諸詮都序叙

洪州刺史兼御史中丞裴休述

(1) 圭峯禪師集禪源諸詮爲禪藏而都序之。河東裴休曰、未曾有也。

(2) 自如來現世、隨機立教、菩薩閒生、據病指藥。故一代時教、開深淺之三門、一眞淨心、演性相之別法。馬龍二士、皆弘調御之經、而空性異宗、能秀二師、俱傳達磨之心、而頓漸殊稟。天台專依三觀、牛頭無有一法、江西舉體全眞、荷澤直指知見、其他空有相破、真妄相收、反奪順取、密指顯說。西域中夏、其宗寔繁。良以病有千源、藥生多品、投機隨器、不得一同。雖俱爲證悟之門、盡是正眞之道、所以諸宗門下皆有達人、然各安所習、通少局多。數十年中、師法益壞、以承稟爲戶牖、各自開張、以經論爲干戈、互相攻擊。情隨幽矢而遷變。周禮曰、函音人爲甲。孟子曰、矢人豈不仁於函人哉。函人唯恐傷人。矢人唯恐不傷人。蓋所習之術使然也。今學者但隨宗徒彼此相非耳。法逐人我以高低、是非紛拏、莫能辯析。則向者世尊菩薩諸方教宗、適足以起諍後人、增煩惱病、何利益之有哉。

(3) 圭山大師久而歎曰、吾丁此時、不可以默矣。於是以如來三種教義、印禪宗三種法門、融餅盤釵鉶爲一金、攬蘇酪醍醐爲一味。振綱領而舉者皆順、荀子云、如振萎領、屈五指而頓之。順者不可勝數。據會要而來者同趣。周易略例云、處會要以觀方來、則六合輞轡、未足多尙。恐學者之難明也、又復都序據圓教、以印諸宗。雖百家、亦無所不統。尚恐學者之難明也、又復直示宗源之本末、眞妄之和合、空性之隱顯、法義之差殊、頓漸之異同、遮表之迴互、權實之深淺、通局之是非、此下敍敍明顯而莫提天傷也。不提耳而告之、指掌而示之。頻伸以吼之、愛軟以誘之。此下敍慈悲懷念赤子也。乳而藥之、憂佛種之夭傷也。自斷善根而作聞提天傷也。腹而擁之、念水火之漂焚也。腹火之慮。今人稍長大沈於五欲、是水火也。挈而導之、懼邪小之迷陷也。既入大乘法中、復恐不入於大乘也。揮而散之、非闕諍之牢固也。既入大乘法中、又互相是非、故揮散之。卽都序之宗趣也。

(4) 大明不能破長夜之昏、慈母不能保身後之子、此下歎悲智與佛同也。佛日雖盛、得吾師、然後迴光曲照。佛悲雖普、得吾師、然後弘益彌多。若吾師者、捧佛日而委曲迴照、疑暗盡除、順佛心而橫亘大悲、窮劫蒙益。則世尊爲闡教之主、吾師爲會教之人。本末相符、遠近相照。可謂畢一代時教之能事矣。自世尊演教、至今能事方畢。日會而通之。

(5) 或曰、自如來未嘗大都而通之、今一旦違宗趣而不守、廢關防而不據、無乃乖祕藏密契之道乎。答曰、如來初雖別說三乘、後乃通爲一道。三十年前、或說小乘、或說空教、或說相教、或說性教。聞者各隨機證悟、不相通知也。四十年後、坐靈鷲而會三乘、詣拘尸而顯一性、此前後之軌則也。故涅槃經迦葉菩薩曰、諸佛有密語、無密藏。世尊讚之曰、如來之言、開發顯露、清淨無翳、愚人不解、謂之祕藏、智者了達、則不名藏。此其證也。故王道興則外戶不閉、而守在戎夷。佛道備則諸法勿持、而防在魔外。涅槃圓教、和會諸法。唯簡別魔說及外道邪宗耳。不當復執情攘臂於其間也。

(6) 嘴呼、後之學者、當取信於佛、無取信於人、當取證於本法、無取證於末習。都序以佛語印諸宗、以本法照偏說、故丁寧勸其深信也。能如是則不辜圭山大師劬勞之德矣。哀哀父母、生我劬勞、吾師之德、過於是矣。後之人觀其法而不生悲感、木石無異也。

### 禪源諸詮集都序卷上行諸詮集。

#### 終南山草堂寺沙門宗密述

(1) 禪源諸詮集者、寫錄諸家所述詮表禪門根源道理文字句偈、集爲一藏、以貽後代、故都題此名也。

(2) 禪是天竺之語、具云禪那、中華翻云思惟修、亦云靜慮、皆是定慧之通稱也。源者是一切衆生本覺真性、亦名佛性、亦名心地。悟之名慧、修之名定。定慧通名爲禪。此性是禪之本源、故云禪源、亦名禪那理行者、此之本源是禪理、忘情契之是禪行、故云理行。

(3) 然今所集諸家述作、多談禪理、少說禪行。故且以禪源題之。

(三) (1) 今時有但曰真性爲禪者、是不達理行之旨、又不辯華竺之音也。然非離真性、別有禪體。但衆生迷真合塵、卽名散亂、背塵合真、名爲禪定。若直論本性、卽非真非妄、無背無合、無定無亂、誰言禪乎。況此真性非唯是禪門之源、亦是萬方之源、故名法性。亦是衆生迷悟之源、故名如來藏藏識。出楞伽經亦是諸佛萬德之源、故名佛性。涅槃經等經亦是菩薩萬行之源、故名心地。梵網經心地法門品云、是諸佛之本源、行菩薩道、萬行不出六波羅蜜、禪門但是六中之一、當其第五。豈可都曰真性爲一禪行哉。

(2) 然禪定一行最爲神妙、能發起性上無漏智慧。一切妙用、萬行萬德、乃至神通光明、皆從定發。故三乘學人欲求聖道、必須修禪。離此無門、離此無路。至於念佛求生淨土、亦修十六觀禪、及念佛三昧、般舟三昧。

(四) (1) 又真性卽不垢不淨、凡聖無差。禪則有淺有深、階級殊等。謂帶異計、欣上厭下而修者、是外道禪。正信因果、亦以欣厭而修者、是凡夫禪。悟我空偏真之理而修者、是小乘禪。悟我法二空所顯真理而修者、是大乘禪。上四類皆有四色四空之異也。

(2) 若頓悟自心本來清淨、元無煩惱、無漏智性本自具足、此心卽佛、畢竟無異、依此而修者、是最上乘禪。亦名如來清淨禪、亦名一行三昧、亦名真如三昧。此是一切三昧根本。若能念念修習、自然漸得百十三昧。達磨門下展轉相傳者、是此禪也。達磨未到、古來諸家所解、皆是前四禪八定、諸高僧修之、皆得功用。南嶽天台今依三諦之理、修三止三觀、教義雖最圓妙、然其趣入門戶次第、亦只是前之諸禪行相。唯達磨所傳者、頓同佛體、迥異諸門。

(五) 故宗習者、難得其旨。得卽成聖、疾證菩提。失卽成邪、速入塗炭。先祖革昧防失、故且人傳一人、後代已有所憑、故任千燈千照。洎乎法久成弊、錯謬者多。故經論學人、疑謗亦衆。

(六) 原夫佛說頓教漸教、禪開頓門漸門、二教二門、各相符契。今講者偏彰漸義、禪者偏播頓宗、禪講相逢、胡越之隔。

宗密不知宿生何作、薰得此心。自未解脫、欲解他縛、爲法亡於軀命、慾人切於神情。亦知淨名云、若自有縛、能解他縛、無有是處。然欲罷不能、驗是宿習難改故。

每歎人與法差、法爲人病、故別撰經律論疏、大開戒定慧門、顯頓悟資於漸修、證師說符於佛意。意旣本末而委示、文乃浩博而難尋。汎學雖多、秉志者少。況迹涉名相、誰辯金鑑。徒自疲勞、未見機感。雖佛說悲增是行、而自慮愛見難防、遂捨衆入山、習定均慧、前後息慮、相繼十年。云前後者、中閒被勅追入內、方却來請歸山也。微細習情、起滅彰於靜慧。差別法義、羅列現於空心。虛隙日光、纖埃擾擾。清潭水底、影像昭昭。豈比夫空守默之癡禪、但尋文之狂慧者也。然本因了自心、而辯諸教故。懇情於心宗、又因辯諸教、而解修心故、虔誠於教義。

〔七〕教也者、諸佛菩薩所留經論也。禪也者、諸善知識所述句偈也。但佛經開張、羅大千八部之衆、禪偈撮略、就此方一類之機。羅衆則漭蕩難依、就機則指的易用。今之纂集、意在斯焉。

〔八〕問、夫言撮略者、文雖簡約、義須周足、理應撮束多義在少文中。且諸佛說經、皆具法、法體。義、理。因、三賢、十地、三十。果、德用。信、法。解、義。修、歷位。證、果。雖世界各異、化儀不同、其所立教、無不備此。故華嚴、每會每位皆結云、十方世界、悉同此說。今覽所集諸家禪述、多是隨問反質、旋立旋破、無其倫序、不見始終、豈得名爲撮略佛教。

答、佛出世立教與師隨處度人、事體各別。佛教爲萬代依憑、理須委示、師訓在即時度脫、意使玄通、玄通必在忘言。故言下不留其迹、迹絕於意地、理現於心源、卽信解修證、不爲而自然成就、經律論疏、不習而自然冥通。故有問修道、卽答以無修。有問求解脫、卽反質誰縛。有問成佛之路、卽云本無凡夫。有問臨終安心、卽云本來無事。或亦云、此是妄、此是真。如是用心、如是息業、舉要而言、但是隨當時事、應當時機。何有定法名阿耨菩提、豈有定行名摩訶般若。但得情無所念、意無所爲、心無所生、慧無所住、卽真信真解、真修真證也。若不了自心、但執名教、欲求佛道者、豈不現見識字看經、元不證悟、銷文釋義、唯熾貪瞋邪見。況阿難多聞忽持、積歲不登聖果、息緣返照、暫時卽證無生。卽知垂教之益、度人之方、各有其由、不應於文字而責也。

〔九〕問、既重得意、不貴專文、卽何必纂集此諸句偈。

答、集有二意。一雖有師授而悟不決穴、又不逢善知識處處勘契者、令覽之、遍見諸師言意、以通其心、以絕餘念。二爲悟解了者、欲爲人師、令廣其見聞、增其善巧、解攝衆、答問教授也。卽上云羅千界漭蕩難依、就一方指的易用、是也。然又非直資忘言之門、亦兼裨垂教之益、非但令意符於佛、亦欲使文合於經。旣文似乖而令合、實爲不易、須判一藏經大小乘、權實理了義不了義、方可印定諸宗禪門、各有旨趣、不乖佛意也。謂一藏經論、統唯三種、禪門言教、亦統唯三宗、各在下文列釋。配對相符、方成圓見。

〔一〇〕問、今集禪詮、何關經論。

答、有十所以。須知經論權實、方辯諸禪是非。又須識禪心性相、方解經論理事。  
一、師有本末、憑本印末故。  
二、禪有諸宗、互相違阻故。

三、經如繩墨、楷定邪正故。

四、經有權實、須依了義故。

五、量有三種、勘契須同故。

六、疑有多般、須具通決故。

七、法義不同、善須辯識故。

八、心通性相、名同義別故。

九、悟修頓漸、言似違反故。

十、師授方便、須識藥病故。

〔二〕初言師有本末者、謂諸宗始祖卽是釋迦。經是佛語、禪是佛意。諸佛心口、必不相違。諸祖相承、根本是佛親付。菩薩造論、始末唯弘佛經。況迦葉乃至鞠多、弘傳皆兼三藏。提多迦已下、因僧起諍、律教別行。罽賓國已來、因王難、經論分化。中閒馬鳴龍樹、悉是祖師、造論釋經、數千萬偈、觀風化物、無定事儀。未有講者毀禪、禪者毀講。達磨受法天竺、躬至中華、見此方學人多未得法、唯以名數爲解、以事相爲行、欲令知月不在指、法是我心故。但以心傳心、不立文字。顯宗破執、故有斯言、非離文字說解脫也。故教授得意之者、卽頻讚金剛楞伽云、此二經是我心要。今時弟子、彼此迷源、修心者以經論爲別宗、講說者以禪門爲別法。聞談因果修證、便推屬經論之家、不知修證正是禪門之本事。聞說卽心卽佛、便推屬胸襟之禪、不知心佛正是經論之本意。有人難云、禪師何得。講說余今此答也。今若不以權實經論對配深淺禪宗、焉得以教照心、以心解教。

〔二〕（1）二、禪有諸宗、互相違反者、今集所述、殆且百家。宗義別者、猶將十室。謂江西、荷澤、北秀、南侁、牛頭、石頭、保唐、宣什、及稠那、天台等。雖皆通達情無所違、而立宗傳法、互相乖阻。有以空爲本、有以知爲源。有云寂默方真、有云行坐皆是。有云現今朝暮分別爲作、一切皆妄。有云分別爲作、一切皆真。有萬行悉存、有兼佛亦泯。有放任其志、有拘束其心。有以經律爲所依、有以經律爲障道。非唯汎語而乃確言、確弘其宗、確毀餘類、後學執言迷意、情見乖張、爭不和會也。

（2）問、是者卽收、非者卽擗、何須委曲和會。  
答、或空或有、或性或相、悉非邪僻。但緣各皆黨己爲是、斥彼爲非、彼此確定、故須和會。  
（3）問、旣皆非邪、卽各任確定、何必會之。

答、至道歸一、精義無二、不應兩存。至道非邊、了義不偏、不應單取、故必須會之爲一、令皆圓妙。

（4）問、以水雜火、勢不俱全。將矛刺盾、功不雙勝。諸宗所執、既互相違、一是則一非、如何會令皆妙。答、俱存其法、俱遣其病、即皆妙也。謂以法就人即難、以人就法即易、人多隨情互執、執即相違、誠如水火相和、矛盾相敵、故難也。法本稱理互通、通卽互順、自然凝流皆水、鑛鉶皆金、故易也。舉要而言、局之即皆非、會之即皆是。若不以佛語各示其意、各取其長、統爲三宗、對於三教、則何以會爲一大善巧、俱成要妙法門。各忘其情、同歸智海。唯佛所說、卽異而同、會三爲一。

〔一三〕（1）三、經如繩墨、楷定邪正者、繩墨非巧、工巧者必以繩墨爲憑。經論非禪、傳禪者必以經論爲准。中下根者、但可依師、師自觀根、隨分指授。上根之輩、悟須圓通、未窮佛言、何同佛見。

（2）問、所在皆有佛經、任學者轉讀勘會。今集禪要、何必辯經。

答、此意卽其次之文、便是答此問也。文云。

〔一四〕（1）四、經有權實、須依了義者、謂佛說諸經、有隨自意語、有隨他意語、有稱畢竟之理、有隨當時之機、有詮性詮相、有頓漸大小、有了義不了義、文或敵體相違、義必圓通無礙。

（3）龍藏浩瀚、何見指歸。故今但以二十餘紙都決擇之、令一時圓見佛意。見佛意後、備尋一藏、卽句句知宗。

〔一五〕（1）五、量有三種、勘契須同者、西域諸賢聖所解法義、皆以三量爲定。一比量、二見量、三佛言量。量者量度、如升斗量物知定也。比量者、以因由譬諭比度也。如遠見烟、必知有火。雖不見火、亦非虛妄。見量者、親自現見、不假推度、自然定也。佛言量者、以諸經爲定也。

（2）勘契須同者、若但憑佛語、不自比度、證悟者、只是汎信、於己未益。若但取現量、自見爲定、不（以下、高山寺ハ十一〇十六丈ヲ欠ク。その後の文の校訂に関しては、本研究の（三）の二四段（1）「一切諸法」以下を参照されたい）

〔付記〕今回をもつて一応この訳注を完結するに当り、一言付記しておきたい。課外ゼミで「大慧普説」を読みはじめたのは一九七四年のことであるが、のち小川の助力を得て、四巻本「大慧普説」と一巻本「普説」、そして一巻本「法語」を読みおえた。「裴休拾遺問」の訳注を発表したこともあって、一九九二年度より「禪源諸詮集都序」を次のテキストに選び、それを読みおわると「円覺経大疏鈔」を中心とする宗密の「本序」を読んだ。それをおえたのが、本年の初めの一九九八年度末である。以下、新たな年度に入つて「円悟心要」を

テキストに選び、新しいメンバーを迎えて進んでいる。大慧・宗密関係のゼミで特に助言いただいたのは、本学中国語講師の前川亨氏である。ここに記して感謝申し上げたい。宗密ゼミの協力者は、主に尾崎正善、千葉正、橋本英樹、道津綾乃、藤原興正、マリオ・ポセスキーラの各氏であり、他に幾回か参加された方もある。それらの協力者に対しても厚く感謝申し上げたい。

(一九九九年七月十七日 結びとして記す 石井修道)